

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

へらへら話

佐藤家の昔話(五)

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

くらはら話

佐藤家の昔話(五)

編 武 田 正

へらへら話

佐藤家の昔話(五)

206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192
鴨うち	百足の医者迎え	小僧持念 ――正月の餅――	小僧持念 ――馬の目に膏藥――	酒の箆抜け	山形の泥棒	鼻高扇	鼻高の呪文	へらへら話	天気占い	河童釣り	誰だ屁	ホラ吹き	ホラ吹き大会	ホラ吹きくらべ
(四二)	(四二)	(五五一)	(五七七)	(四六三)	(四六三)	(四六九)	(四二九)	(三八四)	(五八五)	(四二九)	(四六五)	(四六五)	(四九二)	(四九二)
百足の医者迎へ	肥桶の酒	片目の牛	源五郎の天昇り	鼻高扇	鬼の子わ綱	もとの平六	河童釣り	誰だっぺ	もとの平六	鬼の子わ綱	雀捕り	法螺童児	法螺童児	法螺童児
67	65	61	59	54	51	45	42	34	29	22	18	15	10	5

207	和尚と小僧	鮎はカミソリ	(五二八)	鮎は剃刀	73
208	和尚と小僧	餅食えば牛			77
209	殿さまとあくび		(五二二)	金なる木	80
210	小僧持念	悲しい茸とうれしい茸			84
211	けちん坊				87
212	大ぼら吹き	の災難			90
213	赤馬と黒牛		(三六四)	搔は薬	93
214	役人と頓智小僧				96
215	小僧持念	火事の知らせ	(五八九)	火事の知らせ	98
216	鎌倉権五郎と鎌倉えび				102
217	まんじゅう				105
218	いじわる和尚				107
219	中ぐらいなねずみ				110
220	豆腐とこんにゃく				111
221	曾呂利新左衛門				113

昔話採訪ノート (五)

(一) は『日本昔話集成』の番号・表題

凡 例

- 一、語り手の話をテープにとり、忠実に翻字した。
- 二、表記については、発音に最も近い言葉としたが、訛りは一部整理した。
- 三、収録の順序は、語りの順序とした。
- 四、資料集として編集・印刷をした。

ホラ吹きくらべ

正月十五日で言うど、ホラ吹き・嘘つき大会が始まった。そしてほこで優勝した者は、「ホラの吹く蔵・嘘の語郎」という称号与えらつて、ほして一年間の人足免除と、こういうわけで、いろいろ、この「みちのく」でも、ホラ吹きの大会があつて、ほこさ行つて覇を競うわけだったど。

んで、いつでも檣下の宿から優勝者が出た。どういふふうな秘密があつかうことと、関東からやはりホラ吹きが尋ねて来た。このホラ吹き、嘘つきというのは、これは動物ではできない。人間に与えらつた特権であつた。ほして僧侶は嘘つかないなて言うてる。宗教の方でも、「嘘つくど鬼に舌抜べろかれる」なて、これも嘘だ。ほれから「武士に二言はない」なて、侍は嘘つかねなて言うげんども、みな嘘だ。侍の嘘は計略はかりごとだ。坊主の嘘は方便である。商人の嘘は、これは掛引きあきんどという嘘だ。全部嘘と嘘のかたまりの世の中だった。

ところが、この嘘も大会となつどまた愉快なもんだ。いろいろな方面からいろ

いろんな嘘が集まってくる。ほんで檣下の宿にその嘘の語郎、あるいはホラの吹蔵という肩書き持った人がいた。で、ある家さ、関東からお客さま尋ねてきて、

「ごめん下さい」

そしたらはこの親父つあんが留守だった。

「旦那さん、お留守ですか」

「はい、おつつあんが、実はなっす、天竺のヒマラヤ山という山、何だか、どういわけだか傾いて、明の国の方さ傾いてきて、何とも仕方ないから、何とか助けで呉ろ、まず、て言っで、お仏さまから線香五・六本持つて、突っぱり支いに行つた」

「はあ、ほうか。んでは、おかちやが……」

「うん、おかちやがやっぱり明の国で大干魃で、何だか、どういうわけだか、大干魃で仕様なくて、明の国の田みな干かわいてしまつて、亀の子の背中みたいにみな割れはじめた。何とかお宅のおかちやに来てもらいだいつて言っで、おら家のおかちやが、ほこさ小便たれに行つた。いや、おら家のおかちやの小便たら、こりや

大したもんだ。万里の長城さ四んばいよっになって、ほして一ふんばりたれるんだらば、ゴビの砂漠さ虹が立ってたちまち大雨になって、ほして四百余州の田、たちまち水かかる」

「姉ちやも行ったか」

「いやいや、姉ちやはまだ小便たれに行つて田さ水かけるな、今練習中だ。姉ちやな、強くて分んね、ほこらこころ掘ったぐつてしまう」

「ほんで、姉ちや、どっちや行った」

「いや、実は姉ちやが天竺の国のお空ふっちゃばげて、何とも仕様ない。んだから天竺さみな雨漏つてしまつて、明の国大干魃たがになつた。こういうわけで、はいつ縫つて呉ろて頼まつて、クモの巢の糸とノミの牙と持つて、天竺の空縫いに行つた。で、はあ、この間姉ちやが、お前もそろそろ年頃になつたんだから、天竺や明の国さ行つて、田うるおす練習でもすんなねて言うわけで、お山の上でやらかした。ところが大したもんだ。あそこさ四んばいよっになって、太平洋の方さやらかしたれば、アメリカ、大津波。ほして今まで下の方さ流つていた南部の川、逆に

なつて来た。太平洋の水増えて、あらら上の方さ流れる。ほら、北川で名付いたげんど、ほこでは北上川で言うようになった。ほうしてこんどはウンと頑張つど奥州・奥州で、太平洋の方さ行ぐ。少しゆるめつど、出羽・出羽・出羽・出羽。奥州・奥州・出羽・出羽・出羽・出羽・奥州・出羽・出羽で言うたもんだから、旅人が、『はあ、ここら奥州・出羽の国だな』て言うて、んだがらて、ここは奥州・出羽の国で言うた。ほして、ポタン・ポタンで落ちんなで、蔵王山の頂上さお釜できてしまった。ほの娘の尻は非常に大きい尻なもんだから、今でもほの大きな尻のことを「お釜尻」なて言うてる。ほして、それはこんど、最上の方さ降つて来たのは、五月雨になつて、萱平の入りに、ナルトの関、あるいは一枚石沢なて言うどこあつけんども、ほこは山菜採りが行つたれば、青空から急に雷さま雨みたいな降つて来て、その一枚石沢滝になった。ザザ滝になった。ザアザア、ザアザア。今でもほのことをザザ滝と言うて、いづどこがあつけんども……。ほして泡ぼこが伊達の方まで吹飛^ふんで行つた。ほして泡が川さ流つて大きい川が泡ぼこだらけになった。今でもほの川は阿武隈川なて、伊達では言うてるそうだ」

そういう風に、淡々としてその息子語ったらば、関東から来た、ほの嘘こき仲間もぶったまげて、

「子どもでこのぐらいなこと語つこんだら、親なんつうものは、まだまだ大したもんだ。こりや、まずはあ、逃げて行くに限る」

て言うわけで、どんどん、どんどん逃げて行つた。して、

「こういうわけで、奥州出羽の国なても言う、きつとあそこら、奥州出羽の国ていうどこだかもしんない。いやいや、まず、ひどいどこさ行つて来た」

と言うわけで、奥の細道で知られる芭蕉なんか、そのあたり通つたのであるうか、まず、「五月雨を集めて早し最上川」なていう句作つたくらいで、最上地方は五月雨だったど。どんぴんからりん、すつからりん。

ホラ吹き大会

むかしむかし、やっぱりこの檐下の宿で正月十五日で言うど、丁度冬も大分長くなつて、いろいろみんな退屈し始める頃、ホラ吹き大会でいうのあつた。ホラ吹き大会、嘘こき大会。

んで、その年は丁度西の年だから、鳥いっぱいとつたことについて話すこと、という課題がでた。ほして入賞した者はその一年間は人足免除、人足でいうな、いろいろお殿さまの道普請とか、ほら荷物背負いとか、煙硝叩き、いわゆる火薬叩きとか、米の積みかえ、いろいろ人足が免除になる。ほして優勝した者には、「ホラの吹く蔵、嘘の語郎」という称号が与えられる。大したもんだ。で、正月の十五日、まず、「兎とり」、こういう課題でホラ吹いた人いた。

兎ていうのは、むかしトリの部だった。今でも一羽・二羽で勘定するが、なぜトリだかて言うど、黒いときは鶺鴒である。白いときは鶯である。夏は鶺鴒のトリ、冬は鶯のトリ、いわゆるウサギで言われる。その兎獲り。かますき一つ獲つた。

その獲る方法、

「雪ざあとかぶって、体全体雪でほとんど隠して、ほして腹の上さそのかますを置いて、右手と左手さ^{ふきとお}露の苔をもつて。ほうすつど兎は木の皮なのばり食って、何か珍らしいもの食いたいと思つて、鼻くんくんさせて、ほこら歩つた。ほうすつど露の苔出て。『これはうまそうだ』て言うて傍さ来つど、前足ちよつとふんづかまえて、かますの中さスポンと入れる。そんで一匹。はい、また、『ありや、あそこさ行つたけあ、露の苔食ねで、どさか行つてしまつたけあ』て言うわけで、次の兎、ぴよんぴよんと来て、また食い始めつど、その兎おさえて、かますの中さストン。たちまち、かます一つ獲つた」

ほんどき、お役人から質問が入つた。

「これこれ、それでは、ほの、露の苔ないどきはどうする」

「はい、お役人さま、露の苔ないときには、ちよんちよこさ黄粉つけて出しておきます」

ほうしたれば観衆はどつと笑つて、まずこれは入賞。

次はキジ獲り。

「いろいろなキジの獲り方もある。糸でヒコキ吊るしておいて、ほして、そのヒコキさはめて獲る。あるいは豆ば、すうつと麻糸に通しておく。キジ釣り。ほれからキジ獲りの人はきわめて足の速い人で、『ほう』て声かけて、先の方さ行つて、南京袋、ひよいとひろげていっど、穴あるなあと思つて、そこさひよいひよいと入るがった。この人の足の速いこと大したもんだ。キジはそういう風にして獲るが、山兎の後足、ちよいとつかまえるぐらい速いがった。これは走るよりも、跳ねるて言うたほうええくらいだつた。ほしてキジ、馬車一台とつた」

「よし、お前も入賞」

次は人里離れた、こつから約四・五里もある萱平かやたいらのずっと奥に、股ぶり沼ふかえていう沼ある。そこは鴨が鰯返すふかえつどき、その人も来ないところで、鴨がゆうゆう鰯返するわけだ。鰯返する頃が、またきわめて鴨の味もええ時だ。それで、ほこさどいう風にして行つて鴨獲つかていうと、その股ぶり沼さ、六月の末頃、すっぽり入る。ほして頭さクゴで編んだ頭巾みたいなものをかぶる。ほうすつど、鴨

は一生懸命、ほこらこら泳いで、疲れつど、

「おお、ええどこへ島みたいなあったなあ」

て言うわけで、ほこさちよこんと上がる。上がつど、手で足ちよえつとおさえて、中の方さ入^いつで、首ちよつとひねつて、そんで一匹。

「あら、友だちはもぐつた、ほんではおれ休ませてもらうかなあ」

て言うわけで、次の奴はちよえつと上がるが、足おさえてキュツと下さ、ほんで二匹。

「ありや、またもぐつて行つた。次、次」

て言うて、これまた何十匹て獲つた。

「よし、お前も入賞」

ところがその時、ここは大字檣下だげんども、大字檣下小字木立山、今の柏木、その木立山から来た人が、こんどおもむろに話出した。

「みんな大きいものばり獲つたげんど、おれあ小物で勝負する勘定で来た」

「ほう、これはおもしろい」

ほして、その人が語るには、その酉年に限って、濁酒がむやみにええあんばいに出た。それで、その濁酒をフゴさ入って、通して澄み酒つくる。澄み酒つくって、その粕を、むかしは柏葉—— 柏て言わないで、大檜、檉檜で、檜の分に帳面つけた。ほして大檜さ粕ば親指大もあるほど、ちよこちよこ、ちよこちよこ箸ではさんで、広場さ置いだらば、雀は、

「いや、ええ米、真白いなある」

て思つて舞い降りて来て、片っ端から突つついた。突つついであるうちに、段々雀が気分ええぐなつて、ほしてとうとう、大檜の葉っぱの上さ、昼眠してしまつた。ところがそこさお天道さま当つて、やつとその大檜の葉っぱくるつくるとくるまつて、全部雀の柏餅できてしまったわけだ。こういう風にして何千羽と獲つた。

「よし、これは一番だ、なかなか思いつきがええ」

こういうわけで、柏の葉っぱで雀とつたていうわけで、その人が「ホラの吹く蔵」という称号をもらうことになった。ところがその人曰く、

「称号いらねから、家の部落を柏の葉木立山と言ったところ、柏木にしてもらわんねべかあ」

と、こういう風な申出があつた。それでそれ以来、大楢のことを「柏の葉」、「柏」ということになつて、そして柏木ということになつたど。

んで、今でもその、大字楢下の山村台帳には「木立山」その上さ「柏」をつけて、柏木立山ていうのが、現在でも公簿にのっている。どんぴんからりん、すつからりん。

194 ホラ吹き

むかしむかし、キジ獲^せめたり、兎捕^せめたり、ものすごい足の早い若者がおつた。

韋駄天走りて言うたように、ものすごい速さで走る。走るて言うよりも跳ねるて言う方が適切なようだった。誰言うとなく、

「あの人は毎日ノミのキンタマ煎じて呑んでいるんだ。んだから、ノミのように足早く跳ねるんだ」

「はあ、なるほどなあ、んだがもしんない。しからばノミのキンタマなて、なぜして、どうする？」

「いや、ええ方法ある。これは上山に万屋善兵衛という家ある。その万屋という称号は、あれないうこれないうと、金看板取り上げるといふ風な家だど」

て言うわけで、若者がみな行つて、

「これこれ、万屋、お宅にはノミのキンタマあるか」

困つてしまった。ないうて言えう金看板持つて行かれる。あるて言えう売つてけろて言われる。困つた。ところがここに非常に頓智のええ若者がいて、

「はい、ノミのキンタマございます。ノミのキンタマ常用すれば、非常に足早くなつて、やつぱり狐・狸のたぐいは、ただ手づかみするいそうだ。そういう話聞いっただ。んで、現在ハちよつと品切れだから、明日お出なつていただかんねべか」

「……」

「いかほどでございますか」

「ええ、たんといらね。二升五合ぐらいもらうか」

「そうですか、結構でございます」

「んじや、明日の午後から八ッ時^{じき}来んぞ、ええか」

「はい、明日ござってけらっしゃい」

ほして、そのいたずらざかりの若い者は、次の日、ノミのキンタマ二升五合買
いに行った。

「今日は、昨日^{きんな}頼んで行ったノミのキンタマもらいに来たげんど、なんと」
ほうしたれば、若者出てきたけあ、

「入れもの持ってきたべか」

「入れものなて、お宅では袋渡さねのか、袋さ入って売らねのか」

「いや、このノミのキンタマだけでは、とんなもんで、ただ持って行ぐど、途中
で爆発してはあ、何の効果なくなんのよはあすあ」

「んじや、何持って来つどええなだべ」

「丁度、二升五合準備したから、その二升五合入るように、シラミの皮準備してもらわんなね。ほのノミのキンタマとシラミの皮ざあ、きわめて相性ええくて、ほの中さ入っで行ぐど、すばらしい偉力發揮すつけども、ほでないど途中でパシクすつどはあ、何の値打ちもないもんだからって、シラミの皮、どうか持つてござってけらっしゃい」

ほういう風に言わっで、いたずらざかりの若い者だ、シラミの皮二升五合ぶり、何ともいたし方なくて、黙ってひき下がって来たけどはあ。どんぴんからりん、すっからりん。

195 誰^{だん}だ 屁

むかしむかし、あるところに若者がいて、その若者が寝てたれる屁が、誰聞いても、「誰だ、誰だ」て聞える。ほして夜中に、屁「誰だ、誰だ」てたれるもん

だから、その部落ではあんまり歓迎さんねがったど。家の人はもちろん、その代りにくさくはないんだげんども、音だけは激しい。「誰だ、誰だ」てたれる。

それさ目つけた町の長者さま、

「よし、ほんじゃ、そいつは確かに貴重なごんだ、おら家では倉番に頼む」

ほして、味噌倉、米倉、宝倉で、倉五つばり座敷だっているあるんだげんども、ほこさ頼むようにした。

「昼間、ほだえ稼がんたてええから、夜、おら家の倉さ寝てもらっただけでええ」

すばらしい旦那衆で、財宝もいっぱいあったんだど。ところが江戸に怪盗団がいんだだけど。ならず者の寄せ集めが怪盗団。それがそこらに瀬踏みに来た。

ここらにどこに金あつかの、物あつかのて聞いたらば、すばらしい旦那衆いて、そこに倉五つもあって、財宝はばっちりある。

「んだらば、はいつ盗まねくてなんねえ」

て言うたらば、ほこにはものすごい屁のたれる門番がいて、

「ん、屁なんて、何でもない、この門番、寝むったうちに、ゆうゆうと仕事する」
て、こういう計画立てた。ところが、「誰だ、誰だ」て音すつどうまくないから、
はいつ一応ふさがねくてはなんねえ。

「んじゃ、誰か行かなくてなんねえ」

「よし、一番若いの、行つて来い」

て、ほして、春先の四月二十一日、お明神さまのお祭りの日、村中、みんな祝
い酒飲んだ。ほしてその若者は茂助て名付つたんだけど、「誰だ、誰だ」て屁た
れるもんだから、「ダンダン兵衛」て言うてた。そのダンダン兵衛もはあ、酒飲ん
ではあ、自分の所さ行つてはあ、三分間おきぐらい「誰だ、誰だ」てたれる。と
ころが、ほの若者が百姓出なもんだったから、

「よし、んだらば屁の孔ぽこき口栓してしまえば、ほのダンダン屁が出ねべ」

と、こういうわけで考えた。て、百姓なもんだから、ほの凍み大根を入れるに
限る。そうしてそおつと忍び込んで行つて見たれば、ダンダン兵衛殿は、何の気
なしに眠っていた。そこさ行つておもむろに醬油さ漬けつたような禪をはずして

呉^けで、屁の孔さ、凍み大根をキリツと栓^けして呉だ。今まで、ダンダ、ダンダと音
しったの、ばったり絶えた。

「よしよし、これからだ」

というわけで、怪盗団が行ったところが、なかなか錠前がはずんね。南京錠だ。
引っぱっても押^ふっぱってもはずんね。ほだえしてカチャカチャしているうちに、
いままで「スウスウ、ダンダン」て出っただ屁だ、いきなり栓さった。その凍み大
根。ところが腹の中の水分吸収して、ほの大根が大きくなったもんだから、絶対
ガスもれねぐなってしまった。ほして腹の中じゅうガスが充満してはあ、登り降
りして歩った。ググググー、ググググー。

ほうすつどこんど、ダンダン兵衛どのは、何だか切なくて仕様ない。二・三回
寝返りしてるうちに、その凍み大根、ぶっぱじげだところあ、大変なもんだ。

「誰だ」の連発。「誰だ、誰だ」

ほうすつど自分が警備に頼まっでいたていう考えもあるもんだから、

「泥棒、泥棒」

て、ダンダン兵衛は大きい声立てた。そうすつど「それ！」ていうわけで、お抱えのその人足がみな集まって、そして怪盗団ば追払ってやって、何も盗らんねがった。その話はお殿さまに聞えて、五十石取りの目明しになったけど。どんぴんからりん、すつからりん。

196 河童釣り

むかしむかし、とってもケチンボウで大金持いだっけど。

そしてある若者が、正月すつだいと思っても、正月に何かえ食うものもない、困ったもんだ。

「よし、何か、こりやええ考えないべか」

と思つて考えだ結果、

「あのケチン坊の長者だます以外にない」

と、一策を案じて、そうして。パカパカ、長者の家さのり込んで行つた。

「旦那さま、旦那さま」

「ああ、どうした」

「実は江戸の見世物屋から頼まつで、河童とつて呉^やろて言つた。河童一匹十両で買^うて言うわけだ」

「何、十両」

その長者の目は輝いた。

「ほんで旦那さんさ五両あげて、おれ五両でええから、その段取りすつから、その資材費、何とかお願いしたい」

「資材なて、どういう風にかかる」

「いや、実は他でもない。河童で言うものは、どこそこの池にいる。旦那とおれ食^うう夜食、準備してもらいたい」

「うん、ほだな簡単なもんだ。それだけでおれさ五両呉^つか」

「はい、五両お上げします」

「よし、ところで若衆、おればほの河童捕め連て行かねか」

「いやあ……」

「いや、おれあ、河童捕めざあ、今迄いろいろ、雑魚捕め、キジ打ち、ほら熊獲りなど見たことあっけんども、河童とりだけ見たことない。何とかおれば連て、んじゃ」

「いや、旦那、河童とりさ御座らねでけらつしやい」

「いやいや、連てんじや。おれあ、むかしから言うたもんだ。金主六分、事業主四分、四分六分が常法か、五分五分でするんだぞ、お前、ほのぐらいだも、おれば連て行かんねつだな」

「いや、そう言れば、ほういうわけだ」

そして、行く道々、旦那と語って行つた。

「河童ざあ、とつても慧いもんで、音には慧いし、まずすぐ人の音など聞いたたりすつどはあ、さつと池の中さ入って行ってしまうからって、ほんじや旦那、約束して呉つか、絶対に声出さねって……」

「ん、約束する。ええ」

ほして、その若者は牛肉一貫匁けつば尻さぶら下げるふりして、ふところさひい
と入ってしまった。

「んじゃ、旦那さん、ここの土堤の陰から見ててける。おれあそこで、しゃがむ
から」

「しゃがむて、なしてだ」

「いや、河童ざあ、肉は好きだげんど、その他に好きな、屁なんだ」

「屁、とんなもの好きなもんだ、なしてだ」

「むかしから、屁のカツパ、河童の屁て言うぐらいで、屁くらい好物なない」

「なるほど、うまいこと知ってだもんだな」

「なかんずく、この、とりわけ一番好きなは、この屁玉の、小玉好きだ」

「ほう、屁も大玉と小玉あつか」

「ありあんす」

「んでは丸くたつて、大きくたつたり、ちっちゃぐたつたり、ちっちゃこい方の

屁好きなか、河童は……」

「いやいや、旦那の方でない。尻さくつついてる尻小玉、屁の小玉でございます」

「ああ、そうか、あれは、そう言うか、屁の小玉で言うか、なるほどなあ、屁の子、屁の小玉な、よし、それ好きか、そこガブツとやられたら、お前……」

「いや、ほこ、金取りだも、少しぐらい仕方ないっだな」

「くつついで取らったら、どうする」

「いや、ほこは商売人だも、くつついで取らっただんでは身も蓋ふたもないから、ほんどきはちゃんと縛るように、ほりや縄もつて来たから、ほして、若干の間を入れながら、屁たっでいなねなだから、んないど河童現わんね。ほして牛肉をチャプチャプさせて、匂いさせて、屁の匂いと牛肉の匂いと塩梅よく流しておくど河童が、この尻小玉の屁の子玉好きだ。屁の大玉は匂いは好きだかも知んねえげんども、小玉目的で来っから、旦那よく見てでけらっしゃい」

「ほう、面白いもんだな、これはよし。おれはこっちから、見当つけて見てっから、どうだ、こりや朧月夜だげんども、雲かかっど釣らっか、それともパツと明

るくなつど釣らつか」

「まず、河童の目ざあ、まなぐ夜行性ということ聞いたから、明るい暗いに関係なく釣らるんだげんど」

「んだべなあ、ほだほだ、そういうわけだ。よし、見てる」

ほの、ちやぼちやぼして、かがんでいても、そして時折口で屁たつた真似して、プップツとその若衆は音立てつた。丑三の頃すぎても、河童はいつこう現わんね。旦那、しびれ切らした。我慢さんねくて、

「これ、若衆、いつ釣らんのだ」

「ああ、旦那、逃げた。あれほど約束しておきながら、旦那、残念だ。一ぺん逃げた河童は慧くてはあ、絶対来ねんだずはあ、いや、今丁度そこまで女河童来て、こしたんたん虎視眈々としておれの屁の子玉ねらつて、いまつうとどとびかかんなあて言うとき、旦那声出すんだも、いや困ったもんだ。ほんではまず、正月は棒にふった。いや、こりや、まず文無しだ」

「いやいや、若衆、そうなげくな、おれも失敗の片棒かつぐ、どうだ。五両でな

く二両二分にまけてけるはあ」

「いやいや、旦那、おれあ、約束したんだず、江戸の業者と、女河童とにかく捕えてお上げすつからて言うこと約束したな、これあ逃げらつたとあつては、おれあ男ぶりは下がるし、まず銭はないし、仕方ない、日頃旦那にもごめんどうなつていつから、二両二分で手打つべ」

と、こう言うて、河童とりの芝居は幕になったけど。ほしてほの若者が二両二分の金——二両二分なんて言うど、大したことないようだけれども、先にはワラジ二足作つて三文ていうたぐらいだから、これは大したもんだ——ゆうゆうと正月してお釣り来たつけど。どんぴんからりん、すっからりん。

197 天気占い

むかしむかし、上の山の城下で、殿さまがずうっと昔は、天気なて関係ないがったげんども、鉄砲あるいは煙硝なて、火薬なて使うようになって、百姓以外に侍も天気予報が必要になつて来た。ほんで殿さまがお触れを出した。

「天気に対して自信のある者は、明日、明後日申し出る。うまく当つた者には、智恵相応のお礼をする。まず、十日の人足赦免だ」

こういうわけで、いろいろ集まつたのは、百姓、これはまずいろいろ天候相手に仕事してんのだから、大博突打つてんだから、百姓の数が一番多かった。その次集ばつたのが、いろいろだ。大工・左官、それから唐傘屋、中には医者まで居だった。むかしの医者というものは、注射や何かえないもんだから、ほとんど漢方薬で治した。ところが漢方薬というのは、夏のうちにいろいろ草集めて、干しておいて、それを使う。んだから気象観測というの、非常に大切だった。まあ冬に、こういう風のときには、夏はどういう風になる。今年の夏が涼しかったら

冬暖かいとか、いろいろそういうこと長年にわたって研究して、うんと寒くなるときには風邪流行^{はや}るとか、あるいは、うんと風吹くときには、眼病になるとか、そういう風なこと、眼病になった場合の薬の準備、そういうようなことで、医者も一応お天気予報に加わった。ほして片っ端からいろいろ聞いて、それをずうっと点検して、ほして一番当たったものに一番ええ御褒美をつかわすというわけだ。んで、今でもそれが使わつてる。

まず第一番に、

『お月さま笠掛かつど、次の日かその次の日、雨だはあ』

「よし、この書記がひかえる」

『それから、朝焼け、朝てっかりは智泣かせて言うぐらいだから、これは雨だった』

『夕焼け真赤なときは、明日天氣がええ』

『毎日、城中で鳴らす太鼓の音、ドンドン、ドンドンてええ塩梅に鳴つど、これは天氣。バララ、バララなて、おかしげな音立てつど、これは雨』

『ケラツツキ（キツツキ）がカラカラーと音やって、リレーのようにこっちの山からあっちの山から、また向うの山さ鳴り響くときが、これは空悪れくて、うす頭痛いて、頭、木さぶつつけんなだど。なて言うて、これも雨』

『山鳴りすつ時、ごうごうて。これは天氣が変る』

「よし」

また、それも書いた。ほれから、

『夜空が、星がうんときれいで、しかもピカピカで、いつもより輝いた時、これは次の日は風だ。ものすごい風が吹く』

『トンビが低く舞うとき、これは雨。あるいは低く高く、低く高く安定しないときは、嵐の前兆だ』

「よし」

『それから、雷様。東の方で鳴つどきは、なんぼ大きい音でも、東かみなり様雨持たずて言うて、決して雨降らね。その日は安心してでええ』

『猫が布団の脇あたりにいて、布団さ顔埋めて、下向きになっていつどきには、

これは雨だ』

『クモが巣かけて下向きになっていつどきは雨、上向きになっていつどきは天気』

「よし」

『たまたま、今度、石ごろ辺りさ大きな青大将がにゆるにゆるって出つ時には雨だ』

『川原の霧がのぼつ時は雨が上らない。ずうつと下りの方さ流つて行く時は晴の天気だ』

「うん」

『ほれから、どこの村にも頭のテコヘンな、そいつが上り下り、何か分からねこと言つて跳ね廻つて歩くときは、こいつは必ず雨だ』

『小虫がテンマリになつたり、離つたり、どんどん飛び交うとき、これも雨』
『蛙が次々にリレー式に啼くとき、これも雨』

『まあ、雨降つてゐるが、途中からミンミン蟬が急に泣き出した時、これは晴れる前兆だ』

こういう風にずうつと言うて行つて、それを提案した人が、みんな十日間人足赦免、あるいはそのうち、うんと当たった人が十五日間赦免だった。ところが今まで言うたうち、十分で言うわけには行かなかった。いろいろなことで当りはずれがあつた。

で、殿さまは晴れの時には、煙硝はたきて言うて、火薬はたきすんなね。いろいろ混ぜものあつたそうだ。楠の木、麻の木、炭にして混ぜる。セン屑と言うて、鉄削つたのを混ぜる。あるいはその当時は黒色薬なて、黒い火薬、そういうものをみな、叩き合せて作つた。その叩くときに雨降りだど、非常に通らね。篩に…
…通らねくて難儀するし、火薬も非常に効かね。不発になのばりなる。んで、
天氣のええ日選ばんなねがつた。

ところがある男の人が黙つて居つけども、

「お役人さま、お役人さま、今日の昼間から雨」

ものすごい曇つた日でも、

「ああ、今日の何時から晴れ、晴れ」

これもまた十分当った。ほんでその人が五十石の禄高頂戴して、お天氣の相談役になった。ほして、「今日は、天氣は何^{なん}た」て聞くと、居ねぐなつて、どきか走つて行く。「おかしいなあ」て言うわけで、ある人がそおつと後ついて行つてみた。ところがその便所^{せんち}んどこさ、禪ぶら下げっだけ。ほして禪て言うのは、何年も洗濯したことないような、醤油さつけたような禪、上から下までずうっとしごいて、ハシヤハシヤしてつど「晴」。しめらつとしてつど「雨」。何だか秋遅く、少しツアリツアリして凍みで来つど「霜の後、雪だ」て言うた。その禪が一番と、天氣予報の晴雨計になつていだんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

198 へらへら話

むかしあつたけど。

あるところに、じんつあそばんちやいで、じんつあが早く逝くなつて、ばんちや

一人ばり暮してで、そして

「今日はお彼岸だ。団子搗いて一つお仏さまさ上げんべ」

と、思つて、団子搗いて、ほして団子まるべて、はいつをお椀さ盛つて上げんべと思つたら、その団子一つ一番上さあげつだな、トンと板の間さ落つた。平らなどこ、コロコロ、コロコロ転げて、

「不思議なもんだな」

と思つて、追つかけて行つた。ほしたらトンと庭さ落つた。庭も平らだけんど、コロコロ、コロコロ転げる。

「どさ行くべ」

と思つたら、ちっちゃこい孔さちよろつと落つて行つた。

「あら、こだなどさ落つて行つた」と思つたら、自分もその孔の中さちよろちよると、いつのこまえ（間）入つて行つた。暗いと思つたら、ほでもなくてはあ、明るくて広いどこさ出てしまつた。して、どさ行つたか、団子、わからね。

「団子どの、団子どの、どさ行つたべ」

て聞いてみた。ほんでも分んね。したればと、向うの方さお堂あつて、ほさ地蔵さま立ってござった。

「地蔵さま、地蔵さま、団子こつちや転げて来ねがったべか」

「ばんちゃ、ばんちゃ、おれはあ、御馳走なつたはあ」

「うわあ、地蔵さま、何だて不調法した。ほの団子なの、土まみれの団子なの、こりや、お上げして……」

「いやいや、そうでなくて、おれ方ほうであやまらんね」

ほだえしてゐるうち、何だかドシンドシンて人の足音して来た。ばんちゃ何だべと思つたら、地蔵さま、

「鬼共来た、鬼。おれのうしろさ隠れる」

「恐かないちや、恐かないちや、おになの」

「ええ、大丈夫だ。おれのうしろさ隠れる」

ほして地蔵さまの後ろさ隠つだげんど、着物の裾見たど。ほしたらば鬼来たけ。
「ん、人くさい。何だこら、人くさい。人来たんねが、地蔵さま」

「来た」

「こっちだ、こっちだ、こっち居た。ばんちやだ」

ばんちや恐かなくて、ぶるぶる隠つてだ。したらば地蔵さま、

「ええ、ええ、ばんちや、ほだえふるえつことない」

「んだげんども、地蔵さま、おら恐つかなくてなんねえぞ」

したらば、その鬼どもだ、

「地蔵さま、地蔵さま、お願いおる。家で頼んでいたばんちや、最近ちよえつと用達し行つて来るなんて行つて留守で、御飯炊き一人居ねくて困つていた。このばんちや貸して呉らんねが」

「いじめねか」

「いじめたりなのしね、大事にするから、貸してけらっしゃい」

「ほうか」

て言うわけで、ばんちや、その鬼に借りらつて行つたわけだ。ほうすつど小舟さのつて鬼が島さ行つた。そうして鬼が島さ行つたれば、

「こういうわけで、明日からお前手伝ってもらうんだげんど、とりあえず、まず明日の御飯炊いで呉ろ」

て、ヘラ一本渡した。米一粒渡して、

「ほいつで三百人分、御飯炊いでけろ」

ばんちゃ、ぶっ魂消た。

「いじめねなて、一粒で三百人の御飯炊いて呉ろなて、おればいじめる」

こう思つて、

「なぜすつどええのだ」

て言うたらば、

「この米一粒入つて、このぐらい大きい釜さ水、みんなして汲んでけっから、ほいつお前炊いでけつどええなだ」

「ほして炊いて、煮立つ湯になったら、このヘラでかましてけろ。このヘラは万倍ていうヘラだ。かましているうちに一粒が何万倍てなんなだ。一振り万倍だから、十ぺんすつど、十万倍になるヘラだ」

そいつ聞いて、ばんちゃ、ほれ、御飯炊いて、ほして煮立つ頃、そのへらでかましてみれば、魂消た。ムラムラ、ムラムラ、その一粒の米ふえてきて、ほしてたちまちすばらしい御飯できた。

「はあ、これは大したものだ」

次の日も米一粒渡して、こっちの方は煮豆して呉^けると、豆一粒よこした。して煮れば、これもむくむくふえて行つて、すばらしく煮豆できる。すばらしいへらなもんだというわけで、一週間ばかり、ほこさ勤め^{なん}だけんど、何たて家さ行きたくて仕樣ない。家思い出してはあ、ほして、

「暇^けで呉^けろ」つたて暇^け呉^けんまいと、逃げるに限るどて、そのへら、ふところさ入ったまんま、そおとと自分が来たどころさ行つてみれば、小舟つながつていだっけ。

「よし、この小舟で」

て言うわけで、その小舟さのつて、そのへらで漕いだ。ほうしたら、スウスウとそのへらの偉力で、たちまち地藏さまのいたところの陸地さ鬼が島から来てし

まった。ところがはいつ気付いた。鬼どもは何十人もして追いかけて来た。んだげんど、舟ないから漕がんね。ほうしたれば、ほの鬼の親方、

「この水飲んでしまえ」

ほして、何十人の鬼は四つんばいになって、川の水飲みはじめた。何だか川の水こころ細くなった。だんだえ減って行つた。ほうすつどばんちゃ考えた。

「かいつあ、笑うど飲まれんまい、笑わせて一つ……」

て言うわけで、へラで尻叩いたりして、口ほつちや曲げでみたりして踊りおどつた。

「ばんちゃ、笑わせる気だつて、おらだ笑わねぞ」

なて、最初鬼はがんばっていたげんど、何とこの身振り面白くて笑わねでいらんねくて、一人の鬼は吹き出した。ワァーッて吹き出したれば、他の鬼もみな移つて、みな吐き出したれば、元の川になって、満々となり、流つて行つてしまった。ほして鬼はどうとう追つて来らんねぐなつて、地藏さまんどこさ来た。

「地藏さま、地藏さま、まず、こういうわけで家さ行きだくて逃げて来たんだ。

んだげんど、このヘラ持つて来らつてしまつたずはあ」

「いやいや、ええ。ほいつあ、おれ保障してお前さ、ヘラ呉れっからはあ、そのヘラはお前の家さ行くど、何でも万倍になるヘラだ。んだげんども、決して世の中さ行つて、ヘラヘラになぞらつて、ヘラヘラ言うもんでないぞ。ええか。地藏さま、土まびれ団子食つたなんて、決して言うてなんねえぞ」

て言うたけあ、はつと氣付いてみたれば、自分の庭さ尻ついて、ヘラだけはあちやんとふところにあつた。ほのヘラさえあつど、米一粒入れば食い切らんねほどの御飯炊けつし、何でもその通り、金一文あれば、そのヘラでさすっているうちに万倍とふえる。して樂々と暮したけど。これがヘラヘラ話のどんびんからりん、すっからりん。

199 鼻高の呪文

むかしむかし、浜辺にある若者がいんだんだけど。ほの若者がいつでも鼻すごくる癖あったど。ほして道々考えてみた。

「鼻ざあ、こすって伸びて行かねもんだべか」

ほだえして考えているうちに、ある天氣のええ日に、海の方さ向かって鼻こすりながら、

「鼻のびろ、鼻のびろ」

て言うたらば、何だか先むずがゆくなつたけあ、ずんずん、ずんずん伸びて行つた。ほして日本海越えて朝鮮、満州どころか、伸びるに従つて、目も先^{まなぐ}まで見えるようになった。

「朝鮮の風景見える、あら、満州の風景見える」

万里の長城越えて支那大陸、蒙古、ずうつと西洋の一部まで行つてしまった。ところが入梅でうっとうしくて、どこの国でも雨降りばかり続いたり、何だか日影

さして来たと思ったら、おかしげな洗濯竿みたいな伸びて来た。

「変なこともあるもんだな」

と思った。触つてみれば何だかツルツルして、洗濯干すにええ塩梅だというわけで、朝鮮の人が朝鮮の衣裳、満州では満州の衣裳、支那では支那の衣裳から帽子から、皆はいっちゃ干した。

「いや、天気ええくて、ええがった。こりや、ええ洗濯竿来て、あつらえむきだ」
て、みな干した。ほうすつどほれ、満タンに、はいっちゃ干したとき見計らつて、午後からの乾いた時、ぐうつと、

「鼻ちぢめ、鼻ちぢめ」

て言うたらば、はいつあ縮まつて、ほしてお倉さ三つ四つ入れるほど、着物寄せてしまった。ほしてはいつ珍らしいもんだから、ほっちの骨董屋、こっちの古道具屋から、ゆずつてけろ、ゆずつてけろて、たちまち大金持になった。

ところがはいつ聞いた隣の若者は、

「よし、んだらおれさ教えてけろ、どういう風にしたんだ」

て言うたらば、

「こういう風にしたら、君もやってみつか」

「いや、おれもやってみる」

ほして、やっぱり「鼻のびろ、鼻のびろ」て言うたれば、もそがゆくなつたと思つたれば、だんだえ伸びて行つて、同じ方向さ行つた。

「ああ、見える見える。朝鮮の風景。ああ支那・満州・万里の長城みな見える。

いやとんなもんだ。鼻のびて行くど鼻と同じに目も見えて来るもんだ。ところが支那も朝鮮も馬鹿ばりでない。

「この前の泥棒竿だ、みなおらだの帽子しやつぽ、ほれから着物盗まつだ。よし今度はそ
う盗ませておかねぞ」

みんな心の中で思っていた。

「よし、今度西洋まで行つたか、ん、大分洗濯もの干したな。これ一つちぢめて呉け
ましよう」

と思つてちぢめ掛つたら、満州で、鋸で——二人で切る鋸で——ワッショ

ワッショで切られかかった。

「いやいや、痛い痛い」

いきなりつぼめる、なんぼしてもほこでのこずり鋸邪魔になつてはあ、つぼめらんね。
そぎそぎ、そぎそぎと、鼻スポンと先の方もがつでしまった。

「いたたた……」

て。ほしてちぢめてみて、こつちや来てみれば、鼻の天辺てっぺんがそがつではあ、
その人あ鼻なしになつて暮したんだから、あんまりええどて、鵜の真似する鳥、
猿真似はあんまりさんねもんだて言うたけど。どんびんからりん、すつからりん。

200 鼻 高 扇

ある、つうとトンマな男が夜夢見たんだど。天神さまさお詣りに行つた。した
れば天神さま、

「お前さ、ええもの呉^けつから、お前はあんまり頭ええぐないげんども、正直者だから、ええもの呉る。たしかに金にもなつす、ええどこと縁組もされつす、んだげんども、図にのつてあんまり変てこなことすんなよ」

て、天神さまに教えらつた。ほしてそれは何だかと思つたれば、天神さまの境内さ扇子が落つでる。ほの扇子、表は天狗の面、裏はオカメの面、彫らつてる。

「天狗の面描かつた方で扇ぐと鼻のびる。オカメの面描かつた方で扇げば鼻ちぢむ。ゆめゆめ、まず、あんまり無駄に調子にのつて無駄にしねで、有効に使え」
はつと目覺めた。ほして取るものも取りあえず天神さまの境内さ行つてみたら、やつぱり古扇が落つでいだつて。

「どれ、一つ試してみっか」

て言うわけで、

「何試してみたらええがんべなあ」

て思つて考えつたらば、すばらしい長者のお姫さまが、若者七、八人も連れて花見に來た。ほうして、ああだこうだて威張りこぐつて、みな人ば顎で使つて、

「ほら、蓆持つて来い、ほら、何敷け。それ何出して食せろの、飲ませろの」て威張つてゐる。はいつつ見てうらやましくなつた若者が、

「ほんではよし、一つあのお姫さまの、伸ばして呉つか」

て言うわけで、木のかげでフアリフアリ、フアリて扇いだれば、「あれあれ」なて言うけあ、たちまちあれよあれよて言ううち、お姫さまの鼻三間ものびて行つてしまった。ほうしたら、ほれ、側近はあつけに取られていだけあ、今度あ悲鳴あけて泣きはだた。何とも仕様ない、お付きの者だ。

「こんではまず嫁入り前のお姫さま、こだな姿見せらんね」

て言うわけで、風呂敷かぶせた。風呂敷かぶせても長いままで何とも仕様ないから、先から象の鼻みたいにくるくると巻いだ。

「いたたた、巻かねで呉ろ」

巻かねでも歩かんねし、何とも仕様ないと、こういうわけで、そおつと大輪に巻いて風呂敷でかぶせて巻いて、そいつば麻糸で巻いてキリキリと結んで、ようやく帰つて来た。花見どこでないはあ、家の中大騒ぎ、そっちの医者、こっちの

占い師たのんで、何してもその鼻治んね。曲げっだもんだから痛くて仕様ない。苦しくてなんねえ。

「ほんじゃ、なぜする」

て言うわけで、座敷さねかせて、枕三十ばりさせた、鼻さ。ほして、

「かいつ、元通りの鼻にした人には金子百両と、このお姫さまのお簪さんに迎える」

こういう立札建てたり、触れ出したりした。「よし、しめしめ」て言うわけで、今度はその若者がそこさ行つて、ほして診察した。

「うん、先生さま、治つかつす」

「いや、治るとも言^やんねし、治らねとも言^やんね」

「いや、ほだな心細いこと言^やねで、何とか治していただきたい」

「そうか、では打つだけの手は打つてみる」

と、こういうわけで、かねて用意して行つたソバ粉とソバ粕、こいつを水に溶かして、

「んでは、ここにお出になった人だ、このソバ菓と言うな、塗ってもらわんなね」
そして障子貼るハケで、そのソバ粉に解いた奴ば鼻さ塗った。ソウソウして大
変気持ええ。

「どうです」

「はい、大そう気持よくございます」

「いまに、んでは、ちぢめて上げっから」

て、そおつと誰にも見えねようにして、そのオカメの面出して、コワリコワリ、
フワリフワリと扇いだれば、あれよあれよと言ううちちぢんできた。そしたれば、
ピタツと元の鼻になつて治った。

「いやいや、すばらしい大先生だ。んでは明日から、おら家の^え聾どのになつても
らわんなねはあ」

ほして、

「金百両はホンマツ（小遣い錢）としてお前さ上げる」

さあ、金に不自由ない。聾どの、三國一のお姫さまと言わつた器量よしと一緒

になる。これよりめでないことになってしまった。んだげんども、若者はお空の雲さ触つてみたことない。

「あいつ、一つ雲を触つてみたい。手は届かない。これあ、鼻であそこまで行かねが」

て言うわけで野望抱いて天狗の面で、次の日、野原さ行つて、仰向けになつて扇ぎはじめた。のびるはのびるは、たちまち雲さ届いてしまった。どさ行つたかと言うど、雷さま一家の囲炉裡さ出はつてしまった。ほうすつど子どもら、

「あら、おかちゃん、おかちゃん、囲炉裡の中さ茸出た」

「こらこら、春先の茸さあ、当つから食うもんでない」

「いや、見てろまず、世にも珍らしい茸なもんだ」

ほん時、ちようどほの雷さま一家のおかちゃんが子どもの下駄の緒立てしつた。下駄の緒立てつどき、焼火箸で下駄の目、つうと大きく火箸焼いっだもんだから、
「どれ、どれ、んだら、割れる茸は食^くいつて言うから、焼火箸、突^つとおしてみ
て、ほつから、ふちやえで見つか、んだど食^くいか食^かんねかわかる」

て言うから、魂消た若者がいきなりオカメの面扇いだ。急にふあつと上さつまつて、そのはずみにそつから抜けて、雷さま一家の雲の上から落つてしまつて、落つどき、クルクル廻つて落つだもんだから、田んぼさ落つて田螺になつたはあていう話もあれば、畑さ落つてヒヨロロンコになつたていう話もあれば、海さ落つてホラの貝になつた、あるいは山さ落つてカタツムリになつたど。その後の消息は明らかでないがったど。どんぴんからりん、すつからりん。

201 山形の泥棒

山形在に、非常に猛^{たけ}つだて言うか、盗みの上手な人が、たまたま仙台さ行つて泥棒してくる。

ところが、ほれ、仙台で泥棒して、山形まで——仙台から山形までには相当な距離だから、相当時間もかかる——仙台と山形、まず数時間で行つたり来たりしつ

たど。これがまず司直の手から逃れる一つの手段だったつて。何時頃仙台で盗まつた。何日の何時頃には山形在にいてはあ、お茶のみしつたつたはあと。んだど警察で来て、

「本当だったか」

て言うど、

「本当だった。誰それ、朝げお茶飲み来たけあ、昨夜の十二時に盗まつて、朝げこつちや来てゐるわけない。んではお前がやったんでない」

そのためには、前さ当てた笠落ちねほど速く走つたもんだど。それぐらいに早く走つてもやっぱり、押えられつ時ある。危なくなつた時ある。その時の準備として、途中さ隠れ家二・三か所作つておかつた。その隠れ家というものは、たとえば部落さ来つど、

「ああ、一服御馳走してけらつしやい」

て、財布二つ持つて、二三十両の金落としたふりして、

「御馳走さまでした」

て行く。ところが、

「お客さん、紙入れ忘せた、大事なもの忘せた」

て、追っかけて来る家だら、絶対かくまって呉^けね。ほいつ、その三十両を知しやねふりしてネコババする家は、

「いや、実はこういうわけで、何とか頼む」

て言えば、

「さあさ、倉さ」

て、かくして呉^ける家だつて。

ところが、金のあるどこに匂いすつかて言うど匂いなのするもんでないげんども、まず、勘で大体わかる。それはどういうことであるかと言うど、大体一番奥さ金を置いたもんだ。そして夜目にすかしてみつど、戸足^{とあし}の一番減っているどこに辿つて行つてみつど、必ず銭の置場であつた。そして戸開けつどここには、ほれ、そこさ、水ふくんで行つて音しないように開ける。あるいは小便を利用するか、そういう風にして、すっすっとして盗^とつど。んだげんども、その大泥棒も最後に

は、まず年貢の納め時きて、押えらったな何だかと言うど、仙台に行つて陸軍の大演習、そんどのきの経理室ねらった。はいるには入り込んだが、ところが軍隊の警備で言うな、きびしくて、そして金持つて逃げつどき、歩哨につかまつて、ブタ箱さ御用になつたわけだ。

202 酒の籠抜け

関所で、他所者が勝手に出入りさんねように、関所でいうのあつて、そこを通るには、手形とか、あるいはいろいろ調べらつたりして通らんねがった。理由もなく通らんねがった。

んで、ある人が米沢・中山・宮内方面さ用があつて行つた。そして丁度、川口と中山の間どこさ行つて、関所さ行つたれば、

「これこれ、どこへ通る」

「はい、中山・米沢・宮内ちゅうざん べいたく ぐないに通る」

音読みにさっだから、なかなかその役人が理解さんねくて、首ひねったけあ、
「通れ、通れ」

て、何も調べねがった。こういう風に関所の役人が性悪たちれことなのばり一丁前でも、非常に品位が悪かった。女からかってみたり、あるいは荷物取ってみたり、いろいろ悪さをした。

で、あるとき、節句の牡丹餅でも娘さ食せっだいと思って、その関所通ったら、
「これこれ、何持つて行く」

「実は娘さ、こういうわけで牡丹餅持つて行く」

「何た出来だ。こっちや出して見ろ、牡丹餅なてとんでもない物もって行つて、
毒殺でもすんのでないか、わしあ一つ塩梅みてやる」
なて言うわけで、

「うん、これは毒の入ってないようだ」
ぐらいで、あらかたやつつけてしまう。そういう風な餅であろうと何であろう

と、皆そういう風にして巻き上げらった。村人は、

「いや、困ったもんだ。とんだお役人に、あそこ通るには、まずはあ、倍持つて行っても半分も向うさ着かね。丁度かおすさ巢を頼んだみたいなもんだ。途中で半分も溶かしてしまつたと同じで無くなつてしまふ」

んで、ちよつとした智慧のある人は新しい小便、桶さひたして、ほいつさ菰こもかぶせて寒酒のええなつめて行つた。ほして行つたらば、

「これこれ、何だ」

なて、役人来た。

「小便水でございまする」

「うん、小便。どれどれ、調べてみる」

樽寄せて、栓とつてみれば、プーンと酒のええ匂いして来た。

「うん、お前どこの小便水はすばらしくよくできてるな。これは水と米がええがら小便がよく出来んのがなあ」

て言うわけで、少し手入れつてなめてみれば一口・二口飲むうちはあ、相当

やらかしてしまった。役人が、

「そういう小便水、おれにも呉れ」

て、御飯さかけて食った。

「いやいや、これはすばらしいもんだ。一粒一粒みな立つ、相当ええ小便水でないど、こうならねまなあ」

なて、ここではあ、小あらかた、やらつで、三分の一も目的地さ届かねがったんだど。

今度、よりより百姓が相談した。

「まず、一かばちか、本当の小便つめて行げ」

「ほだごとしたら打首だべ」

「ほだな、何か一つこれらかさねど、分らねべ」

て言うわけで、元のじんつあ、また前の樽さ、こんど本当の小便つめて、蓋して菰かぶせて背負って行つた。

「ああ、これこれ、また小便水持したな」

「はい、さようでございます」

「どれ、検査するから、こっちさよこせ」

暇ならしてはあ、また別の人あ、

「御飯の立つ小便水もって来たか」

て言うわけで、有無を言わず、その口栓とって御飯にかける。いきなりガブ飲みした。とんでもない。これあ本当の小便だ。「ウエー」て言うけあ、みな吐くやら、御飯は全部駄目になるやら、「無礼者！」て言うてみたげんども、結局は小便水のもんで人を制裁したなていうど、自分だの首あぶないもんだから、泣き寝入りした。それで降決して百姓町人の持ちものに手かけねんだけど。ほの小便樽がきわめてええ薬になつてはあ、決して役人ざあ、ほれから悪さしねがったど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、檣下さ福聚寺というお寺あつて、そこさ持念という小僧さんがいた。この小僧さんはきわめて惻発で賢い小僧さんであつた。

あるとき、友だちの家の馬がうんと春先なもんだから厩まやから離つて出はつて、そこらうちかけ廻しているうちに、何間違つたか、木の枝めさ目引めつかけて、盲めくらになつてしまつた。片目つぶしてしまつた。そしてはあそこで、

「いや、困つたこと始まつた」

て、そこは、ほれ、友だちのおつつあんが、久しくはあ、中風に倒つて休んでいた。

「可哀そうなもんだ、おつつあんが中風で倒つて馬まで目つぶしてしまつてでは、売るに二束三文だ」

なぜなうまい工夫ないべかなあて、ほの持念は考えた。

「よし、うまいことある」

て言うわけで自分の家の鶏まなぐば、目さ膏藥貼はつて、ほして上山の市場さ持つて行つた。ほしたところが、誰だあれも目のつぶつだどこさケチつけて買わねがつた。ある一人の人あ、半金はんかねで買つてみた。ほうしてそおつと膏藥はがしてみたれば目は健全だつた。

「何だ、何の膏藥貼つたんだ。こいつあもうがつた。こりや」

次の日、また兎さ膏藥貼つて、はいつ背負つて行つた。ほうして出したれば、「しめしめ、あいつも大丈夫だぞ」

て言うわけで、その肥えつた兎、安くふんずけて買つた。ほうしてそおつと膏藥はがしてみたれば、なゝに、目は健全だつた。

「これも、もうがつた」

このもうがつた話は上山じゆうさ、みな聞こえた。目さ膏藥貼つたのは、肉付きもええし、ツヤツヤして、まずええものばり、これまで二度来た。ていう話はもう城下じゆうさ拡がつた。

ほの次の日、馬さ膏藥貼つて引張つて行つた。そうして欲のふかい連中だ、み

なほの馬、すばらしく肉付きええくて肥^{こえ}てる。見たところもええ、膏藥はがしてみつど、また目あるんだど、何かでいたずらして貼つてよこすんだべということになつて競争買いになつて、すばらしく高く売つた。そしてそおつと膏藥はがしてみたれば、こいつは本当の盲だつたつて。んだげんども市場で売買したもんだから、はいつは元さ返すのも何だつて言わんねくて、馬、怪我させた家では非常に持念さ感謝して馬高く売つてもらつてええがつたて安泰に暮したけど。どんぴんからりん、すつかりん。

204 小僧持念 — 正月の餅 —

むかしとんとんあつたけずま。

あるどこで非常に旦那衆いで、ほしてほこではいろいろ、なかなか縁起かつぐ家だった。

ところが若衆だ女中だ、正月の餅搗き始めた。神さまさ上げるていうわけで、ほの餅も丸べだれば、後さなつて勘定したれば、ちやうど四十九になった。怒るまいとごしやぐまいと、旦那かんかんになつてごしやえだ。

「こともあろうに、正月から始終苦勞してんなねようでは、ほだな餅搗きで、にさだあつたもんでない。ほげな野郎べら、みな追出^ぽしてやつから……」

ごしやがつではあ、まず。ほとほと困つてしまった。ほして奉公人だの女中だの、いる人は大半、家さなの帰らんね人ばりだ。んだから三十なつても四十なつても兄んにやになつて、その家さハイハイなて居^いんなねような昔の状態だったもんだから、困つてしまった。ほんで持念^{こんねん}さんさ相談に來た。

「ええ、ええ、今からおれ行つて旦那と話してくる、今日^{こんにち}つあ
て行つて、

「結構なお正月でござつた」

「結構な正月なて、持念、ほだごどあるもんでない。おら家ではひどい目に合つた。四十九の餅搗がつて、正月から始終苦勞しんなね。今年一年、まず棒にふつ

たみたいなもんだ。困った野郎べらなもんだ」

「いやいや、旦那さん、そうでない。これは縁起のええごんだ」

「縁起ええなて、何^なしてだ」

「いやいや、これはな、世の中にいる福の神で言うな、七福神で七人の福の神さ
まいる。こいつさ旦那さん、七つずつ上げて見らっさい。きばつとでないか、は
いつ一つ足んねの、一つうかい（多い）のったんでは、福の神ケンカして、お宅
さろくな福の神さま、つかね。平均に渡つどこでお宅さ福つくのだ」

「うん、ほうか、ほんではおら家ではええことあんなだな」

「ほだほだ、ほだごと知しやね旦那でないと思った」

「ああ、持念、ええこと教えて呉^けだ。ええ、ええ、ほだか。んだらみんなば追^ほ出
さねでおっから…」

ほだえしている矢先に、女中は旦那からお茶持って来いて行つたれば、何な拍
子なもんだか、闕さ端かかつて、ほの土瓶落として割ってしまった。そうすつど
旦那ごしやえで、

「元旦から、こだなもの割るなんて、とんでもない、ほんじゃやっぱり縁起悪れ年だ。おれはつくづく予感した。お前出はって行げ」

「旦那さん、おれ出はって行ぐど、行ぐどこないから、何とか給料なの安くたてええから、置くばり置いてけらっしゃい」

なんぼあやまつても聞かね。はいつ見つた、常々つねがねその女中さんば憎くなく思つてだ一人の奉公人が、また行つて持念さんさ相談した。

「何だ、また腰も落付かねうち、また始めたか」

「いや、しでかしてしまった」

「ほうか、仕方ない。旦那さんおめでとうございます」

「また、おめでとうか、いやいや、本当か、何してだ」

「これは昔から唄にあるんだ。〈貪どんと貪と打ちくだき、後に残るは金のつるかな〉金づるばりだ、お宅さ残つたの」

「はあ、ほんでは、おらえの家、やっぱりええどこばりだな、ええ、女中許す」
て、金づる教えて呉だんでは女中は許すからって、何なく女中さんがそこに居

ることになって、かえってええ塩梅ぼっこして呉^けだていうわけで賞めらったって。
どんぴんからりん、すっからりん。

205
百足の医者迎え

むかしむかし、ほの、昆虫の世界、いわゆる虫の世界があった。

ところがどういうわけか、青虫、いきなり腹いたくなった。

「痛たたた…、何とも腹いたい」

ぐっと丸っこくなくなった。頭左右さ振って、いたい、いたい、いたいてドダバダ
苦しんでいる。他の者は見るに見かねて、

「ほんでは医者呼ばらんね、医者はほこらに居ない。江戸まで行かなくては医
者は居ね。困ったもんだ。誰かほんでは医者さ走ってもらわんなねっだな」

「ほんでは蜘蛛さん、お前早いから、蜘蛛の子みたいだって言うから」

「いや、おれは短距離は早いげんども、長距離はわかんね。川あったりすつど、飛び越えたりするわけには、行かね。流さつでしまうど、ほれまでだ」

誰それさん、ええがんべ、彼ええがんべて言うたげんど、みんな不合格。

「ほんでは、川さ入つても流さんね、足も十本、二十本流さつでも、こつちの方さ五・六十本足残つてる百足さんさ頼んだらええがんべ。百足さんさ頼め」

そういうわけで、百足さんさ頼みに行つた。

「いや、青虫が腹痛ではやむを得まい。んではおれは大いそぎで出掛つから」
ていう返事もらつて走つて来た。なんぼ待つてでも来ね。昼間になつたはあ。

やがて、来てもええがんべはあ、まだ来ね、片脇では「いたい、いたい」て汗出してる。昼間なても来ね。何しつたべ。

夕方になつて、

「今度、来る頃だべなあ」

て、しびれ切らして、皆して百足さんの家さ行つたれば、まだ出掛けねでいだつ
け。

「家のワラジ二十五足、村中集めて二十五足、五十足そろったばかりで、後の五十足、何とも寄せらんねくて、ワラジ作り始めっだ。江戸まで行くには足減って何とも仕様ないから、ワラジ履かねど行かんね」

ほんで何とも仕様ないくて、今、藁打って泥棒おさえて縄なうていうことあつけんども、藁打って、今ワラジ作って履いて行くなて、まず大変不都合なことだげんと、何とも仕様なくて、そういうわけでワラジ作った。ほしてまだ出かねんだげど。んだから足いっぱいあつても、ええ時と悪れ時あるんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

206 鴨 う ち

あるところに、とっても鉄砲打ち好きで、上手で、ほして鉄砲打ちの自慢話というど誰も聞く人いねがったどはあ…。

んで、ある若者さ、また鉄砲打ちの自慢話始まった。

「いやいや、旦那、旦那、自慢話ええげんども、ほだな、食^かせもしねで自慢話ばりしたんでは、誰も聞く人いねぐなんのだ。表にはハイハイて居つけんども、ほだな、はっじえげだな話聞くだくないなだ。御馳走して、うまいものこういう風に打^ぶったて言えば、始めてはいつは旦那、なるほどて言うつだな」

「それもそうだ、んだらば今夜、おら家さ来い。青首御馳走すつから」

こういうわけで、夜招ばつで行つた。ほうしたれば、ほの鴨の青首捕^せめてきて、自分ばり肉食つて、ほの若者さは大根ばかり食せた。若者は、ほれ、

「旦那、まず大したもんだつたな」

て、旦那おだてて、旦那、有頂天になつて、

「どうだ、その青首の味は……」

「大へん結構だ、まず最近こだな青首、御馳走なつたことない」

「んだべあ、おれ獲るな、きわめて上手に打つて来つから、味までええんだ」

「ときに旦那、おれあ青首ゾロツと並んで集まつどこ知つてだ」

「はあ」

「ほだな、一つ二つでないぞ、何十、あるいは何百と並んでいる」

「ほう、はいつ、なぜするもんだ」

「ほだなもの、首ひっこ抜いて…」

「うん、首ひっこ抜くと、血あ抜けて、味ええな、別つだな。うまいことやるもんだな、若衆に似合わねで、うまいこと知ってるな」

「土くさくないし、いきなり引っこ抜くと…」

「うん、鴨は泥土から来て、泥くさいつだ。ほして、いきなり引っこ抜いて土喰付けねで…」

「ほたつだ、土喰付けては、土くさいからな、よし、んではおれさそこば案内しろ」

「旦那、案内すつけども、只で嫌^やんだつだな」

「ん、只なて、おれも言^やねつだな」

「んでは、仕方ない、まず夜行ぐんだから、一晚そこへ居らんねがも知んねし、

あれだから、鮎でもぶつて呉^けろ。おれあイナリ鮎でも海苔巻きでも、どっちでもええから、あとそいっちゃお菜^{かす}と、ええ塩梅たのむつだな。旦那にまかせっから」「青首、ほだいいっぱい居たどこだら、ええ。ほして、ほいつは毎晩ほこさ來っか」

「いや、毎晩、まず毎晩なていうもんでない、ほれこそ久しくそこさある。秋遅く雪降るまで段々太くなる」

「はあ、不思議なもんだな、肥えて來っか」

「はあ、肥えてくる、青色もだんだん濃くなってくる。秋盛^{さか}濃くなってくるんだ」旦那、鴨のつもりだ。ほしてコソリコソリと行つて、

「ここだ」

「なんだ、鴨ざあ、空前^{からまえ}どか沼地さばり出つど思つたら、畑さ出んのか」

「ほだほだ、青首ざあ畑さ出る」

「いや、今の今まで、鉄砲打ちしつたげんども、畑さ青首出つざあ知しやねがつたえ、うわあ」

「ほだ、旦那も抜けでつからよ、ほだな沼地や川さは、流つた者しか行かねなつだな」

「あんで、流つたものか」

「ほだ、流れついたものや、流つたものは、ほれ、川や沼さ行んかも知んね、本ものていうな、畑だ」

「ほう、畑さ青首なあ、今の今まで知しやねがつた。よし」

ほして行つて見つど、

「旦那、ここで這え」

「ほうか、這つてか、火縄さ火つけんぞ、ええか」

「ええ、ええ、火縄銃などいらね、首たま押えて、根っこボーボーと引っこ抜くきりだから」

「ほだえ夜ざあ、簡単に引っこ抜くいが」

「ああ、引っこ抜くが。嫌やんだてばり言うな。旦那、おれ今引っこ抜いて背負わせっから」

「ほう」

「ほの前に、旦那持ってきた小夜食^{こやしよく}、御馳走なるべ」

て、そこでまず、モツキリ一杯かぶつて、

「海苔巻き、うまい。イナリ鰯はうまい、お宅の奥さんは料理人だ」
なて、おだてて、ぺろっと平らげて、

「ここで這つて、ここから行つて獲んべ」

「何だ、なんぼ待つても青首来ねど、こりや」

「何だ、旦那、青首来ねなて、青首だらけだどら、ほこら…」

「どれ」「こいつ」

「こいつあ、大根でないか」

「こいつ、宮重大根、青首大根で、こりや青首つだな」

「おれあ鴨のごんだぜ」

「何だ、鴨なて、青首さ招ぶなて、おれさ食せだな、大根ばかりだったどら、
んだからこいつのことだと思つたつだな」

「何だ、ほだべてあなあ。押えて引っこ抜いて、土くさくなくて、一番うまいの何のて、話あうますぎると思った。ほうか、ほんでは今度からお前さ鴨の肉食せつから、鴨居つどこ教えろ、今度から」

て言うたて。どんぴんからりん、すつからりん。

207 和尚と小僧 — 鮎はカミソリ —

あるところに和尚と小僧と暮していた山寺あつた。

ところが、ほの和尚はむやみ、肉だとか、魚だとか好きだ。本当の生臭さ坊主だ。むかしは四足二足、生臭さは食ね、植物でもネギは生臭さの部だつて、ネギまで食ねがつた。んだげんども雑魚捕めは好き、雑魚は大好きで何とも仕様ない。小僧は、ほれ、他さ言れつどなんねから、使い出しては鮎そおつと焙^{あぶ}つては食う。ちよつと来^こね勘定して鮎焙りしつた。鮎は香魚で言うて、これはとてもうまいも

んだ。イワナか鮎かて言わっただぐらいだから、ほの、鮎焙ったどこさ、小僧ひよつこり帰って来た。ほして、

「和尚さま、和尚さま、何焙った」

「うん、カミソリざあ、ええ香りするもんだな」

「ほだ」

「あら、カミソリなて、金でないどこれ、和尚さま」

「こいつあなあ、カミソリで言うげんど、カミソリの木の葉っぱだ」

「はあ、まるで雑魚みたいなもんだね」

「いや、これはカミソリの木の葉だから、木の葉焼いて食ったって、誰も何ても言
ねんだ。立派な木の葉だぜ、ええか、よく憶えておけ」

ほして、

「こういうことは見ざる聞かざる言わざるで、ほういう風におぼえていんなね。
ええか、分かったか」

ほだえしているうちに、檀家から法事さ招よばった。二人はタカタカ行つたれば、

橋渡つど思つたれば、いっばい、橋の下さ鮎泳いんだ。ほうすつど小僧は、

「和尚さん、和尚さん、ここさカミソリの木の葉いっばい居た」

「こらこら、馬鹿なこと言うな、見ざる聞かざる言わざる」

「はい」

行つた。ほして法事さ招ばつで帰り道、何考えて来たか、ずうつと来るうち、

風がファツと吹いて来たけあ、和尚さんの帽子吹つとばさつだ。ほんでも何を考

しゃつぽ

えていたもんだか気付かないで来た。ほだえしているうち、カラスあ飛んで来たけあ、糞ひつかけらつだ、カラスに。ほして禿頭さビシャツと落つだ。いきなり手をやつてみたらば、帽子しゃつぽない。

「これこれ、小僧、おれの帽子落つだぞ。お前気付かねがつたが」

「和尚さん、気付いたげんども、和尚さんが、見ざる聞かざる言わざるて言うたもんだから、見ざるのつもりしつた」

「ほう言うとき使うもんでない。こんどは落つだもの、皆拾つてこい」

小僧はその帽子拾つてきた。ほしたれば木さつながつていた馬、尻尾おっぱ上げだけあ、

ポタポタポタと馬糞落した。いきなり和尚さまの帽子さ馬糞、山もりつめて帰つて来た。

「持ってまいりました」

「何だ、この野郎、ほに、帽子持つて来^こいて言うに、馬糞まで持つてくる馬鹿あんまいな。しかも帽子の中さ入^いつて持つて来るなて」

て言うたれば、

「今、和尚さん言うたばりでないか、落^おつたの皆拾^{ひろ}つて来^こいって、今おっしやつたばりでないか」

「うん、仕方ない、カミソリの木の葉焼^やいて食^くせつから、ほの帽子洗濯^{せんたく}してこい」
て言うたて。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、ある寺さ、和尚と小僧がいて、して、和尚さまが、

「高野山さ行って修行してくる。留守しつかりたのんだぞ」

て、小僧さ言い渡して、ほして旅に立出して行った。幾日何十日おもつても帰つて来ね、ほんで昔は出家の身では妻帯さんねがった。それで坊守ぼうもりとかおばさまて言うていた。んで、その小僧さ、坊守からも、

「まず、早く、うちの住職迎え行ってもらいたい、何とか探して来て頂きたい」

「んだらば、坊守さま、唯今から和尚さんば探しに行つて来つから、旅仕度お願いします」

こういうわけで、おにぎり頂戴して、ずうつと行つた。したらば大きい山あつて、その高い山の麓さ一軒家あつた。ほこさ行つてみたらば、すばらしくいっぱい牛べいいだっけ。

「おかしいもんだ、こだえ山奥に、こだえ牛飼べいつてる」

なて思つていたれば、そこさ行つて、一夜の宿お願いしたれば、

「ああ、泊らっさい、こつちこざっさい」

きわめて待遇ええ。

「さあ、お湯さ、どうだ」

何だて。ほして、

「まず、こだえ牛^{べこ}いだつた。牛でも見せてもらうかなあ」

と思つて、ずうつと厩^{うま}さ行つたらば、十番目あたりさつながつていた牛が、涙
ボロボロ、ボロボロ、小僧^{こぞう}ば見てこぼしている。ほして舌^{べろ}で板塀^{いたへい}さ「ここで、ダ
シモチ食うな」て書いた。

「何か、こりや。ダシモチ食うなて、何かあるんだな、なしてだべ」

と、こう思つてだところが、やはり節だもんだから、餅が出た。

「さあ、あがらっしやい、あがらっしやい」

食つたふりして、そいつ次の朝げ、その家の人の食う御飯の中さ入つで呉^け
だ。知しやねでその家族が皆はいつ食つたらば、何だか足の方からおかし気蹄

割ったみたい足になったけずあ、たちまち牛になってしまった。

「ははあ、読めた。この涙こぼして、ダシモチ食うなて言うたのは、ほいつは和尚さんだ」

ほだえしているうち、ほこの一番旦那が山さ。パカパカ、パカパカ行つたけあ、木の枝折^おだつて、ほして木の葉っぱの大きな付いっだな持つてきて、家内中さ食せたれば、足の方から人間になった。

「ははあ、あの葉っぱ食せつど、元の人間にもどるんだな」

て言うわけで、がらがら行つて、その葉っぱ持つて来て、和尚さんさ食せたれば、したれば元の和尚さんになって、「ああ、ええがった」て。ほして、

「実は、こういうわけで、坊守さまも檀家の人も、みなお待ちかねだ。すぐ帰つてけらつしやい。んだげんど、とんでもない話だ。ここでみな、人さダシモチ食わせて、牛にして売つて金もうけしたんだ。何とかこいつ一つ打ち^ぶ上げて呉^けんなね」

て言うわけで、そこさ行つていろいろ話した。んだげんどお寺さま、人ば打^ぶち

上げたなてもいらんねもんだから、ほこまず、早々にいとま暇して帰ってきた。

今でも、んだから「ダシモチ食うな」て言う家がある。ダシモチには、その頃ハンミョウという毒虫がいて、やつぱり牛みたいに涎ダラダラ出す中毒が起った時代あつたそうだ。んだもんだから、その頃、ダシモチは食うなていましめたことだけど。どんびんからりん、すっからりん。

209 殿さまとあくび

むかしむかし、あるところに、とっても短気な殿さまいたんだけど。ほして、

「お茶をたもれ」

なて、そのお茶遅いど、そのお茶盆を蹴返すやら、吹つとばすやら、何だかない。まず大した短気だ。

「お湯わかせ」

「もう少しでござりまする」

「もう少しなて…」

て言うてはあ、水のうちから入って、「これ、三太夫、冷めたいでないか」なて言うくらい短気な殿さまであった。

ある日、奥方がちよつとした気のゆるみから、あくび半分出かかった。「無礼者！」て言うど、

「余の前であくびするなて、気ゆるましてた証拠だ、もつての他である」

て言うわけで、南の方の島さ島流ししてしまった。そして島流しされつ時、その奥方が懷妊してだ。ほして漁師の家でそのおぼこ産なして、そして育つた。

ところが、その子どもは奥方に似てきれいだ。段々だんだんきれいになる。ほして物ごころつくようになったれば、漁師の子どもだ、あんまりきれいなもんだから、妬んで、

「お前のおつつあんが居ねでないか、お前は父無てなし子だ。父無し子、父無し子」て、いじめられる。奥方も何とも仕様なくて、お父さんの殿さまの話語って聞

かせた、娘さ。「ほうか」て、娘もすでに十才にもなったもんだから、聞き分けて、

「んだらば、おれ、今からお父さんと会ってくる」

「ほだごと言うたて、向うはお殿さま、傍さも寄りつかんね。門前払い食うぐらいがオチなもんだから、行かねでおいでここで暮せはあ」

て、奥方言うた。んだげんども行ってみたい。その離れ小島から本土までの便がなかなかなくて、ようやつとのせてもらつた。その、のせてもらうときに、白椿の木一本持つて、ほして内地さ渡つて来た。道々その椿の木持つて、少女が売り歩いた。

「金の花咲く木はいらんかね。金の花咲く木買ってけらつしやい」
て、触れて歩つた。ところがはいつが、その殿さまの耳さ入つた。

「金の花咲く木だらば、余が欲しい。その子どもを呼べ」
て言うわけで、城中さ呼ばつて行つた。ほして、

「これ、娘。白い花の椿の木、本当に金の花咲くか」

「はい、左様でござりまする」

「わしが買う」

「んだげんども、お殿さま、一つだけ条件がある」

「何だ」

「この木植える人が、決してあくびしてなんね」

「何だ、あくびしてなんねなて、人間つあ、あくびなの常に出るもんだも、あくびしてなんねなて言うことはあるもんでないべな」

その間髪を入れず、その娘は、

「いや、実は何年前に、あくびしたばかりに、わたしの母親が島流しさつで、現在もその島に、わび暮ししてる。わび住いしてる。その、おれは娘だ。何をかくそう、あなたの娘だ」

見れば見るほど、むかしの母親の若いときのそっくりで、そろそろきれいさの頭角現わしてくる頃だった。はいつ、しげしげと見っただ殿さま、

「いや、おれ悪れがった。お前のお母さんば、そんな辺鄙などこさ流したりして、ほして妊娠したのば、ほだんどこさ流してやって、おれ悪れがった」ていうわ

けで、その娘さ詫びて、すぐさま奥方を呼び寄せて、ほれから三人仲よく暮らした。それが結局、金の花咲く木だった。どんぴんからりん、すつからりん。

210 小僧持念 — 悲しい茸とうれしい茸 —

むかし、榎下しめくの宿さ、持念という小僧さんがいて、榎下の部落では、むかし、春と称して、「大水沢山、今年開いた」て言うど、その大水沢山さ行つて、五棚あるいは八棚、何間伐つてもええ、ただその代り売つてはなんね、焚く分には、何間伐つてもええ、と、そして大体五間あるいは七間で、出るほど分けて、「おれは大きいどこ欲しい」「おれは大きくなくつたてええ」て言うわけで、みんな分け山して、木伐つた。ところが昔なもんだから、榎の元の方なの割つさけね奴は、山さ置いてきた。重たくて背負うに背負わんね。割るに割らんね。ところが割りかけて山さ傷つけて置ிட்டのさ、何時となしに、ある春先、山さ行つてみたらば、

もさもさ椎茸出っだ。ほうしたれば、

「ああ、椎茸だ、椎茸だ」

て、村中の人あみな椎茸とりはじめた。ほうしたれば、ほの持念さんが言うた。

「何だべ、お前だ。春先から、ほだな茸食うんだらば、一年中悲しい想いしてんなねぜ」

「なして」

「かいつあ、何て言う茸だか知っていたか」

「知つてだ。こいつあ、椎茸だ」

「ほりや、ほだごどばりお前だいうて、これは椎茸の上さ、また字喰^ふ付^ついているなだ。悲しい茸て言うなだ。悲しい茸なの食うんだら一年中悲しい想いしてんなねぜはあ。春先からほだな食ってだら…」

「ほんでは駄目だ」

て言うたけあ、採り始めたり何かえしった人、小あらかた採ったな、そこへ、ボエツ、ボエツと打ち^ぶ投げた。そして山分けして帰って来た。

次の日、持念さんが大きなハケゴ背負って行って、茸集めしった、みんな投げたな。したけあ、

「ああ、見つけたぞ、見つけたぞ、持念。この野郎、おえねえ野郎だ。何だ人さ
悲しい茸だなんて言うて、自分が今日拾って行って食うつもりだべな」

「いや、今日は持って行って御馳走ならんなねっだな」

「なしてだ。お前だ、悲しい茸みなひっくり返したべな、採ってかっちやえした
べ」

「返^かつちやえしたっだな」

「悲しい茸、ひっくり返してしまつたら、うれしい茸になるんだ。今日からはこ
の茸はうれしい茸だ。この茸食えば一年中うれしい、うれしいと言う、うれしい
日が続くなだぜ、ええか、分つたか」

「はあ……」

て、みんな魂消て、ほの持念さんの頓智のええなには、感服したけど。どんぴ
んからりん、すっからりん。

211 けちん坊

むかしむかし、どこの村でも、どこの宿でもけちん坊という者いだつた。まず出すもんだらば、懷さ入つた手出すのも嫌やんだ。舌出べろすのも嫌やんだ。出すこと一切嫌んだ。こういう人がいつかつた。

ほんで、まず、行火抱あんかいたりすつど燃料費かさむていうので、ここの部落でもある家なんか、夜寝る前、家内中ワラ打ちして、ほして温まつたところで寝る。

「ああ、どこそこで寝ワラ打つたぜはあ、寝ろはあ」

て、はいつあ寝る合図になつていゝようなもんだつた。ほして家内中、魚なて買わねで、割箸渡される。真中さ醤油の鉢置いて、その醤油を割箸さふくませて、御飯食んなね、ほういう家あつた。

ところが、「梅干ざあええもんだ」て、けちの友だちあ来て語つた。

「まず、眺めて一がたけや二がたけ御飯食くい。ほれから、はいつ舐め舐め一がたけ、二がたけ。食て、また一がたけ、二がたけて言うど、梅干一つも大變持つも

んだ。二日間はたっぷり持つ」

ところが、ある人が、

「いやいや、とんでもない。まずおれは大分気付けて来たげんども、おらえの息子は大酒飲みになって困った」

「なしてだ」

「おれは割箸一本ずつさ、しみ込ませて酒つうと舐めつけんども、おらえの野郎は二本ずつさ割箸つつ込ませて、酒のむ。大酒飲み野郎だ」

「はあ、ほれから、お前だ、何だかんだ言うたげんども一番お菜の長持ちすんなは、蛸だ」

「…」

「しごぐど、三日間味すんぜつす」

て言うたつて。ほのぐらい、先にはいろいろ気付けていた人いた。

ところが、ある部落火事になって、種籾から何からみな焼いてしまったつて。で、「何とも仕様ないから、隣村さ行つて、いろいろお願いさんなねべ」て、こう

いうわけで、庄屋という人が方々廻って歩った。

「いや、あそここのけちん坊の家さでは、とてもとても、ワラ屑捨てたどて、奉公人が、すこだまごしやがれでいだったから、行くなだけは駄目だね」

て、みな語ったつて。ところが、

「いや、行つて、もらわんねくて元々、んじや話してみろあい」

て言うて行つたところが、

「どういうわけで来た」

て、ぎよろつとにらめらつて、みんなすくみ上がった。ほして、実はこういうわけで火事になつて、種籾から農具からみな焼いてしまった、百姓、なぜしたらええか分らね、て言うたらば、旦那、

「ほうか、大変お気の毒なことだ、おら家では常々^{つねがね}けちつていつけんども、こう

いう時人助けすねでなんねえために、みんなと収入なて言うなじだ。どこか儉約しねど、生きて行かんね世の中だから儉約してるだけであつて、世にいう、みな悪口すつけんども、ほだえ悪れ者でない。まあ農具の古^{ふる}な、みんな呉^けでやる、

ほれから種子に必要なものは、全部やる。ほして百姓続けなさい」

て、こんな風に言わった。

んだから、無駄ていうな、徹底してはぶいて、ほして、そういう一朝有事のときさ、そなえて置かんかねもんだど。只けちばっかりでなくて、やっぱりその世の中の内費、こういうものを、うんと節約すんなねて言うことを、その人は身をもつて教えただけど。どんぴんからりん、すっからりん。

212

大ぼら吹きの災難

むかしむかし、ある船の渡し場で、雲助だ、船頭だど酒飲んで、大ぼら吹きはじめた。ガヤガヤ、ガヤガヤて、お客さままだ眠らんねくて大迷惑だ。

「いや、おれは山で、牛ほどもある熊の口の中さ手突っ込んでやって、
腸はらわたみな
引っ取り出して、ほうしてその熊殺したった」

なて言うのいたと思えば、

「猪ばにぎりこぶし一つで捕^せめだ」

「いやいや、おれはな、海さもぐって行つて、人より大きい蛸^{たか}ば、足ば千切つて投げ、千切つて投げして、頭^{たか}だけ持つてきた」

「鯨^せば捕^せめた」なていろいろ自慢話したら、ある人が、

「いやいや、おれはな、こだなもんでない。今はこだえて、雲助やつていつけんども、元は大泥棒だった。通る人、みなぶち殺して銭とった。あの時なの、三年前に、侍ばぶち殺して五十両の金盗^とった。お前だ、五十両の金拝んだことあつか。おそらくないだろう」

ガヤガヤ、ガヤガヤてお客さま一人もねむるもさんね。

「こだんだら困ったもんだ」

と思つたれば、隣にいた若い町人風の者は、

「いや、実は三年前、その大泥棒に殺さつたなの、おれは息子だ。親父の仇、覚悟しろ」

て、あいくち抜くそぶり見せた。

「さあ、みんなここで見届けて行つてける。おれは仇討ち赦免状もつていだんだ。こいつがおれど、ここで行き会つたは、百年目だ。ただ今から尋常に勝負して、そい首叩き落として呉れっから」

こうなつたれば、ほの、今まで大ぼら吹きしつた雲助は、いきなり両手ついて、
「いや、おれは雲助こそしてっけんども、人なの殺したことないなだ。嘘だつた」
「何だ、とんでもない。嘘は絶対言^やねて言うたではないか、ただ今から、お前の首もらわんなね。三年前、おら家の親父は五十両持^たつて通るとき、何者かに殺さつた。それで手がかりもなくていたところが、何の機縁か、ここでそなたとめぐり合つた。いぎ尋常に勝負、勝負」

て言うたら、青くなつてワナワナふるえてしまった。ほしてはあ、後のものもはあ、参つてしまつてはあ、音一つ出さねでしまった。して、

「何とか、この場をお見逃し下さい。ほだなもんでない。おれはほだなことしたことないのだ」

て、あやまった。して、ほの若者は、実は役者だった。んだげんども、あまりにもやかましくて寝らんねから、みんなのために一芝居打ったんだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

213 赤馬と黒牛

むかしむかし、薬売りの商人が、ずうつと行商して歩^{ある}つた。ほしてこれから峠にさしかかつどこに、店しつた木賃宿があつた。

ほこさ泊^かまつて、ぶつ魂消た。シラミとノミと、もさもさ居た。何とも仕様ない。夜、搔^かいで、ほつち搔き、こつち搔き、一晚ねむらんねほどやつつけらつた。で、ほの薬屋考えた。

「ばんちゃ、ばんちゃ。なしてここにこだえ高いもの、ただ、こだえして置くのだ」

「何だつす、お客さん」

「いや、ほかでもないげんども、ここに赤いなと、薄黒いなと居た。これは赤馬と黒牛て、おら方^{ほう}で言う」

「何だ」

「こりや、こいつだ」

「はいつあ、ノミとシラミだべ、お客さま」

「いや、そうとも言うか知んねげんども、これは江戸さ持^しって行つたら、とんでもない高いく売れるもんだ。はいつ、高いもの、ただこだえして遊ばせておくなて、もつたいない」

「あらら、高く売れるか」

「おれあ、世話して呉^けつから、帰りまで捕^せめておけ」

「はいはい、ほんでは間違^{まちが}いなく捕^せめておつから」

て言うて、ずうつと行商して帰^{かえ}つて来て、またほこさ泊^{とど}つた。

こんどは、ばんちや、せつせと捕^とめたもんだから、一匹もいねくて、ぐうぐう

眠むれた。次の日、

「あの、お客さま、なんぼで世話してもらわれんべ」

ノミとシラミ、いやというほど持つて来た。

「ああ、ばんちゃ、言うな忘^わせっただげんど、こんでは駄目だ、つぶしてしまつたど、こらはあ、つぶした馬や牛買う人ざあ、どこにも居ねっだなあ、丸ごと十匹ずつ串さ刺して、ほしてほの赤い馬の方は、これは醤油塗つて、こんがりと焼いて、ほれからこっちの黒牛の方は、こいつあ塩焼きだ。十匹ずつ焼いて塩焼きにして、串さ刺してそろえておかねど、商品価値ていうな、ないなっだな、ばんちゃ。ほういう風にしておがっしやい。おれあそうすつど今度来たとき、はいつ、ちゃんと江戸さ高い錢で売つて呉^けっから」

「はあ、ほうか、おれあ爪でつぶしてしまつたまなあ」

て言うて、その商人がさつぱりかゆくなく、ゆうゆうと泊ることできたけど。

どんぴんからりん、すっからりん。

214 役人と頓智小僧

むかしむかし、江戸の番所の前で、小僧っこはなりまた（どなった）。

「いやいや、ぶっ魂消た。いや、とんなこともあるもんだ。馬と豚の子生んだ。

いや、馬、豚の子生んだ。隣村のどこそこで、馬、豚の子生んだ」

はいつ聞いっただ役人と物見高い江戸の住民が、ほの部落さ、どんどん走って行つた。ほしたけあ、なんぼ行っても馬、豚の子生んでるわけない。どこ探してもそだなことない。ほして、

「あの野郎、ほに、嘘こきあがつて、とんでもない野郎だ」

て言うわけで、役人が走って来た。

「こらこら」

て、押えらつてしまった。

「何だ、馬、豚の子生んだなて、とんでもないこと言うもんだ。馬、豚の子生んだなて、ほだなこと今までないべな」

「お役人さま、誰か馬、豚の子生んだなて言うたがず」

「お前言うたでないか」

「いやいや、とんでもない、おれあ馬が豚の子ば、踏んだて言うたんだ」

「うん、踏んだ、踏んだはあり得る話だ。これは仕方ないな」

「とにかく、お役人さま、ほういうことで駄目だ、あなただ勉強不十分だ。いつの世の中に馬が豚の子なの、生むことあるんだ。おれあ言うたの、さっきから、太郎兵衛さんの馬が、次郎兵衛さんの豚の子踏んだて騒いでいんだて話したんだ。弁償しろの、何だのて言うけがらよ」

「ほうか、あり得る話だな、仕方ない」

「勉強不足では分んねったな。おれ課題出すの、当ててみる」

「うん、大きいほら叩くな、んだら、お前言うてみる」

「馬が東の方向いたら、尻尾おっぽどっちだ」

「それあ、西の方に決まっていんべちゃ」

「ほだから、駄目だ。よくこだな役人に使っているな」

「馬、東向いたら、尻尾西にきまつていんべな」

「いやいや、ほうでない。ええか、お役人さま、馬なのどっち向いだつて、尻尾は下しか向いていねなだ」「こんちくしょう」

て言うわけで、とうとう役人がさんざん小僧にからかわつたど。どんぴんからりん、すつからりん。

215 小僧持念 — 火事の知らせ —

榎下の持念という小僧つ子が、最近めきめき頭角をあらわして来たので、庄屋のある人が、そいつ妬しよねんできた。妬しよねんできた。

「あの野郎、いつか鼻あかしてけんね」

と思つて、常々つねがねつらく当つた。まあ（魚心あれば水心あり）て言うのの反対で、
「あの庄屋、ほに、人ば、ママ子あつかいにしうまくない庄屋だ。いつか仇とつ

てけんね」

こういう風に思ってた。ところがある晩、隣村火事になった。ぼんぼん、ぼんぼん火事になった。ほうすつど持念は羽織・袴さ袴着て、

「庄屋さん、庄屋さん、隣村火事でござんす、隣村火事でござんす」

て言うた。声低く出したから起きね。ほして何だか、もさもさすつから、奥方起きてみたれば、袴姿で持念さんがいたわけだ。

「何だ、持念さん」

「いや、隣村火事で、今しがたまで、ぼんぼん燃えつだげんど、お知らせ上がった」

「何だ」

旦那さ、いきなり奥方教えに行つたれば、

「ああ、ほうか」

て言うわけで、旦那、おっとり刀で走つて、吹つとんで行つたときには、火事は終つて、ほして役人から、

「何だ、庄屋のくせして、その怠慢ぶりは隣村火事だていうに、かけつけらんね庄屋では、わかるもんでない」

て、こてんぱんに油しぼらった。

「あの持念の野郎、ほに、おえね野郎だ。袴着て、『あ、火事だ、火事でございませう』て、お湯の中で屁たっだみたいなこと言うてっから、おれあこだなことなつた。よし、あの野郎、しぼってけらんね」

て言うわけで、帰って来て、

「こりや持念、おれはただ今、油しぼらつて来た。こんどから戸でも何でも、バカバカ叩いて、ほして、おれば起こせ」

こういう風に言った。

「はい、かしこまりました」

こんどは次の日、カケヤ（大工さんがタテマエの時など、上でバンバン叩く、あのカケヤ）持って行つて、雨戸であろうが、表のササラ戸であろうが、ジャガ引っぱだいた。

「旦那!! 火事だ、旦那、火事だ」

て、いきなり、ぶっ魂消て起きて来た。

「どこだ、火事は」

「庄屋さん、起こし方ざあ、このぐらいで何たべっす^{なん}」
て言うた。

「どこ火事だ」

「いや、まず、どのぐらいでええか分んねくて、あとでまた低いがつたの、高いがつたので、ごしやがれつどなんねから、ちよえつと練習してみたんだ」

「練習か、練習だら、こだえぼこさねてええがんべな」

ほれから決して、持念さいじわるしねがつたどはあ。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、あるところに若者がいて、山さ山菜採りに出かけて行つた。ほしてずうつと山さ行つて、道迷つて、ほこら彷徨しているうちに、何だか、コヤコヤ、コヤコヤで、「ハッ」なて気合いかけるような音する。何だと思つたれば天狗だ集まつて、博奕^{ばくち}ぶちはじめつだ。

「ほう、こりや面白い」

ほして、ほこさ行つて博奕打つどこ、しげしげと見つだれば、見つかった、天狗に。

「こらこら、貴様、何ものだ」

ほの恐ろしい顔で、高い鼻で、ギョロギョロ目でにらみつけらつた。

「ははあ、おれば威嚇すつどこだな。ほだらば荒い人の名前言うて呉^けましよう」
と思つて、

「おれは、鎌倉の権五郎だ」

はあ、鎌倉権五郎て言えば、源平合戦の折に、片方の目さ矢傷を負った。はい、友だちに引っこ抜いてもらって、ほして、その戦鬪遂行したという、鎌倉一の豪の者て言わつた。その鎌倉権五郎て言うたもんだから、天狗はぶっ魂消た。

「そう言えば、度胸ある。われわれの顔見ても、動作見てもたじろがねし、一歩もしりぞかね。きつとあれは豪の者にちがいない。それ逃げろ」

て言うけあ、鳥の羽毛の団扇みたいな持ったけあ、いきなり脇の下から羽根出たと思うと、その多くの天狗はみなことなく飛び去ってしまった。

ほの後に残った錢、ごっそり若者が、かつさらって、そして山菜なのぶち投げではあ、やつこらさつと背負って家さ戻ってきた。

隣の人、その話聞いて、

「いやいや、ほだえいっぱい錢もらって来るえんだら、おれもほういう風に言うてもらって来らんね」

て、教えらつた道順、ずうつと行つた。ほうしたらばやつぱりほこで、天狗だ、丁半博奕打つてだ。

「それ、二六の丁」「そりゃ、三五の半」

いろいろ夢中になってだ。恐つかないげんども、脈など落付かねげんど、プル
ブルてほこさ行つてみた。

「ほりゃ、また来た。貴様、誰だ」

て言^やつた。鎌倉まで憶えつだげんども、権五郎を忘れてしまった。常々えび食^{つねがね}
いだい、えび食いたいて思つていたな、口さ出はつてしまった。

「鎌倉えびだ」

て言^やつた。

「おお、鎌倉えび来た」

て、天狗だ、みな集まつて、

「みんな、御馳走なんべ」

て言^やうわけで、はいつ、引つさいではあ、みんなしてムシヤムシヤ食^かつでしまつ
たけど。んだからあんまり人真似さあさんねもんだけど。どんびんからりん、すつ
からりん。

217 まんじゅう

むかしむかし、藩がちがうと、しきたりから礼儀作法から、細かく言えば、食いもの、その他着物にいたるまでいろいろ、村山モンペとか、置賜モモヒキなて、置賜モンペなて違っていた。

ところがある時、七ヶ宿のある村さ、まんじゅう一つ落して行つた。ところが大変なこと始まつた。まんじゅうなていうの、山の中だから誰も見たことない。ほして、

「いやいや、しくじりさ行つたれば、すばらしいもの落つでだつて。何だか見たどこ、ファファしたようだげんど、動く」

まさか、動いたわけでないげんども動いたように見えた。何ものだか分んねていうもんで、村中みな集まつた。

「ほれ、おれも行つてみる。おれも行つてみる」

大きい村でもないもんだから、

「こいつは何だか分んねもんだから、庄屋さんに聞いてみる」

庄屋さんさ行って聞いた。

「おれは、この年まで、いろいろ生きて来たげんども、ほだな話は見たことも聞いたこともない。どれ、おれも行ってみんべ」

ていうわけで、行ってみたら、庄屋さんも見たことない。

「へえ、不思議なもんだ。どうだ、かいつ刀で切ってみろ」

「かからねか」

「いやいや、こだえいっばいしてだから、かからっだて、あれだべ」

「えい」

というわけで、切ってみたれば、中から小豆出はった。

「はあ、ここ二・三年、小豆の出来悪れと思つたれば、こんちくしょう、みなこいつ食つたんだ」

て、切らっだど。どんぴんからりん、すっからりん。

218 いじわる和尚

むかしむかし、けちなお寺だったって。どき行っても威張りこがしてばりいて、人ば三分にこき降ろして、自分ばり七分で人ば困らせて喜んでいるお寺だった。村中から、まず鼻つまみ者だった。

で、ある日、ある大きい旦那さ招ばつで行った。ほこでは餅で招んだ。

「んだらば、こりや安心して、大きい面つらして食くうえ」

で、まずはあ、つうと（少し）昼間（食）抜いたぐらいにして、夜に餅さ招ばつで行った。ところが、ほこの旦那聞いた。

「うん、御円寿さま、御円寿さま、まず、お寺さまざあ、食ねもの何々あるもんだつす。おらだ素人で、こりや、さっぱす分からねつだ。はいつ教えてもらわんなね」

「いやいや、四足、二足食ね」

「ほれから、後、ないもんだがつす」

「後は、まず、魚類も生臭も駄目だ。餅や野菜類は、これはさしつかえない」
ほして、みんな席さ着いて、ほの和尚も席さついた。和尚が箸とつたれば、ほこの旦那、「待った」かけた。他の人は、

「いや、うまい餅だ、こっちはうまい小豆餅、うまい納豆餅」

て、食った。先には小豆餅とちようちん餅は先、て言うて、小豆餅一等最初食うのが常法だ。その次はたいがいクルミ餅とか、小豆餅の次は色餅だ。ほれから一番最後は塩っぱい納豆餅だった。納豆餅最初から食うなという人は助平だなて言つて、あんまり歓迎さんねがったわけだ。

ところが、小豆餅食うべと思つたら「待った」食った。

「和尚さま、ちよつと待ってけらっしゃい」

「何だ」

「あなたは、四足・二足は食ねて言うたな」

「いやいや、四足・二足は食ね。これは四足・二足ではあるまい」

「いや、ほでない。中の餅は四足だ」

「なして…」

「熊餅だ、熊ざあ四足だ」

「はあ、ほうか、熊餅か、うん、んではうまくないなあ」

「ほして、また、つけたのはウズラ豆で言うて、これはウズラだから二足だ」

「はあ」

て、ほして、みんなうまいうまいで言うて食うとき、腹減ってぐうぐう喉鳴っ
けんど、四足二足食ねて言うたもんだから、ほの餅何としても、お寺食うわけに
いかないし、みんな食うな眺めて帰って行つたつた。ほしてほれから、あんまり
檀家の人とか、村さいじわるしねぐなつたど。どんぴんからりん、すつからりん。

中ぐらいなねずみ

むかしむかし、姑と嫁がいて、ほだしているうちに、カタコト、カタコトで音したけあ、ねずみ出はつて来た。ほしたけあ、嫁あ、

「あららら、大かいねずみだ^{おっ}ごと」

姑かか、

「なに、あだな小^ちつちやこいねずみだどら」

いや、大かいねずみだ、ちつちやこいねずみだ…。

「ちつちやいず」

「んだて、ちつちやこいなて言うげんども、あだな八寸もあるような、大かいべず、おかちや」

「大かいざあない、ちつちやこい」

大かい、ちつちやこいで、二人で言い合いたげんども、どうしても先には姑かかざあ偉くて、御無理御尤もで聞かんね。大かい、ちつちやこいて論判して

るうち、ねずみはまた出はってきて、泣いだど。

「ちゅうちゅう、ちゅう」

結局、大きくも小つちやくくもなく、ほのねずみは中ぐらいたったど。どんぴんからりん、すつからりん。

220 豆腐とこんにやく

むかしむかし、あるところに、豆腐とこんにやく居だけど。ほして豆腐はザルさ入れで買わつて行つて、ほこの女中さんが、手ばずして落した。豆腐は、まじ見たどこはほだんでないげんども、中はザクザクになつてしまつた。

「いやいや、痛い痛いちや、こら困つたもんだ。ほさ行ぐど、こんにやくさんなのええつだなね、なんぼ打ち^ぶ投げらつだつて、まじ怪我したなんて、痛くしたどこなんてなくて、ええつだ。まじ、おれあこりや、やつこいばかりで、つうと

ほっちゃぶつつかり、こっちゃぶつつかりすつどはあ、元の豆にならんねつだ、こりやまず困つたもんだ」

て言うわけで、

「こんにやくさん、こんにやくさん、お前はうらやましいなあ、まずお前みたいな体に、おれあ一度なつてみたいげんど」

て言うたんだ。ほしたれば、こんにやくさんは、

「いやいや、豆腐さん、お前の方は、おれより仕合わせだかすんない」

「なしてやつす」

「おれざあなあ、いつでも呼ばられつ時は、今夜食う、今夜食うて、今にも食れるようなことばり言^やつて、ざわざわてばりいんなねず」

て言うたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

曾呂利新左衛門

むかしむかし、秀吉の時代に、曾呂利新左衛門で言うて、刀の鞘師だったど。
ところがその刀がそろりそろりと抜ける。天下第一の名人だて言うなで、誰しも
新左衛門のことを曾呂利、曾呂利で言うた。

ある時、秀吉がひどく病氣して、ほして何だか分らねんど、段々衰弱だんだえして行
ぐ。ほだえしてるうちに、盆栽の松の木枯っでしまった。ほうしたらば、なおさ
ら氣落してしまつて、

「余もこれきりだ。おしまいだ」

て、なげいて、日に日にやせおとろえて行つた。何とかええ医者いねべか、何
とかならねべかと言うてるうちに、新左衛門がほこさ行つて歌詠んだ。

御秘蔵の常磐の松は枯れにけり

千代の齡よわいを君にゆずりて

こういう風に詠んだ。ほうしたけあ、「はあそうか」て、

「松の木は、おれの身代りになって呉たか」

ほだえして気分ええぐなってるうちに、薄紙はぐように、段々ええぐなった。ほしたけあ、

「これ、新左衛門、何かお前にお礼を差し上げっだい。望むものはないか」

「いやいや、上さま、一か月間の一文の倍増しで結構でございます」

「ああ、新左衛門、お前は欲のない男だな、一文の倍増し。それはどういうことだ」

「はい、第一日は一文、二日目は二文、三日目は四文でございます」

「そうか、何だ、子どもの小遣錢にもならねほどで、お前は満足するのか」

「いやいや、そうでもないげんども、この位にさせていただきます」

「よし、んだらば…」

て言うわけで、会計係さ命じて渡した。

八日経ったれば、百二十八文になる。十日経ったれば五百十二文になった。二十日間経ったれば五百二十貫二百八十八文になった。

「ありやおかしい」

て言うわけで、会計係、ソロバンはじいてみて、何と三十日になったら、こんどは馬車二十台で運ばんなねことになる。

「いやいや、こんではとてもかなわね。ほんではまず、新左衛門、新左衛門、余が参つた。二十日間で、まず勘弁して呉ねが、ほの代り他にもう少しお前さやつから…」

「はい、結構でございます。んでは他に頂かせていただきます」

「何だ」

「袋さ一つ、米頂戴したいげんど」

「おお、そんな、ええどこでない」

「四・五日後にもらいにあげりますから、お倉番さそういう風に言うてでけらっしゃい」

ほうして、四・五日経ったら、馬車何台どさ、紙袋一つつけて行つた。何すつど思つていたら、

「このお倉の米、全部頂戴して帰ります」

て言うたれば、お倉番がぶつ魂消た。ほして秀吉のところさ走って行つた。

「実はこういうわけで…」

「ああ、一袋ぐらい呉^けでやれ」

「いや、その袋は、また、どでかいんだ。馬車何台さつけて来た袋ではあ、すぱつとはあ、倉さかぶせてしまったはあ」

て。

「うん、武士に二言はない。その倉は新左衛門に渡せ、生命ないと思えば安いもんだ」

て言うわけで、錢五百二十貫二百八十八文と、倉一つの米、そつくり頂がつたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

昔話探訪ノート（五）

ここ榎下の観音さまが祀られているのは、今はなくなつたが福聚寺という古い歴史のある場所であるという。

榎下では、正月十五日を「前の正月」と言い、大正月は元旦から十五日までをさし、この十五日で終るものと考えられて来た。正月二十日が「後の正月」といわれ、後の正月が「嫁の正月」であり、小正月、子もちの正月であるという。

正月十五日、すなわち「前の正月」の最後の日には行事も多く、各家々を単位として行われる「鳥追い」や「団子さし」。そして夕方から行われる「ヨワヨワ」（祝い祝い）は、いわゆる御柴灯、置賜で言う「ヤハハエロー」である。

明治時代まで、この正月十五日の行事の一つに、福聚寺に集まって「ホラ吹き大会」が行われたという。

この「ホラ吹き大会」の折にホラの上手な人に「ホラの吹く蔵・うその語郎」という称号があたえられたといい、佐藤家でも多少その称号をもらったことが

あつたろうという。この事については『山形の民話』第二号に詳細を記したので、参照されたい。ただここで、正月の行事の一つとして寺でそれが行われたことを重視したい。

この集に収めた一九八話「へらへら話」を表題としたのは、棒木で昔話を保存する中で、この話には棒の先の方を筥型に削ってあつたものだという佐藤孝一氏の記憶があるので、特に取り上げたものであつた。

また一九七話「天気占い（ホラ）」で天気占いをするが、「猿は人間よりも天気占いがずつと上手で、猿酒は十日以上雨がふらないとわかると作る」といった話も聞いた。それから二〇八話「餅食えば牛」の中で、ダシモチというのは、ネギ・ミョーガ・ミズ菜などを細かく刻んで醬油をかけたものにモチを入れるものであるが、それは食うなど言っており、それはそのダシがうまい季節にはハンミョウという虫の卵が葉についているからで、これは毒だからだという。なおハンミョウの成虫は飛んで止まるとき、振り返るような格好で止まるのは「ハンミョウが

屁をたれて、それで人が死なないかと思つて振り返るんだと言っている」そうである。とにかく「お伽衆」が昔話をたくさん知っているのは、単に昔話だけでなく、部落の指導者であり、相談を受ける知識人であつたことを知らせてくれるものである。

へらへら話
佐藤家の昔話(五)

昭和四十八年七月三十一日 印刷・製本
話者 佐藤 孝一
編者 武田 正

南陽市三間通二三二の三

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

へらへら話 佐藤家の昔話(五)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十二年十二月十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』(一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『むかしあったけど』(一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『米沢市築沢の昔話』(一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『米沢市塩井の昔話』(一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『安楽城の伝承(一)』(一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『安楽城の伝承(二)』(一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊)
- 『安楽城の伝承(三)』(一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊)
- 『高畠町和田の昔話』(一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
- 『及位の昔話(一)』(一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
- 『及位の昔話(四)』(一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊)
- 『及位の昔話(五)』(一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊)
- 『佐兵ばなし』(一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話(一)』(一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のこころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市檜下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)